
マブラヴオルタネイティヴ オリジナルループ

闇枷煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マブラヴオルタネイティヴ オリジナルループ

【Nコード】

N0777Q

【作者名】

闇枷煉

【あらすじ】

『コレは、絶望に溢れた世界で戦う少年少女たちの“あいとゆうきとゆうじょうのおとぎばなし”である』

オリ主も活躍、稀にR-15な描写、独自設定も出てくるため苦手な方はご了承ください。

なお、同名小説を理想郷掲示板アルカディアにも掲載しています。アルカディアではG A I Aと名乗っています。

作者名を変えてしまうという愚拳を犯してしまった事を、深くお詫

びします。

皆様のご感想ご意見お待ちしております。

動き出す『因果』（前書き）

“英雄”は諦めない。
ハッピーエンドを掴み取るまでは……

動き出す『因果』

第一章：動き出す『因果』

「……………ん？」

目を開けると見慣れない天井があった。

否、ソレは本来見慣れたはずの天井。

身体はそのままに、首と視線を彷徨わせて周囲を確認する。白い天井に部屋を照らす蛍光灯の光。散乱した勉強机、法則も何もなかった押し込みであるだけの本棚、部屋のドアの付近にはハンガーに掛けられている白綾袴の白い学生服。

此処は…

「俺の……………部屋？……」

その呟きに答えるモノなど何処にもいない。

“この”感覚にも慣れたものだ、と、青年——白銀武は身体を起こした。

一度だけ大きく伸びをして、自分の身体をぺたぺたと確認してみる。がっちりとした胸板に腕、六つに割れた腹筋、奥底から漲る様な体力。

ラジオ体操の要領で深呼吸をして意識を更にクリアに。

間違いがない。

再びのループだ。

意識をハッキリと取り戻したおかげか、脳内に様々な平行世界からの記憶や知識が流れ込んでくる。

「はは……結局何処の世界の“俺”も失敗した訳か……」

吐き捨て、拳を握り締める。

爪が皮膚に食い込み血が流れるが、彼は気にも留めなかった。

また……多くの世界で彼の仲間が死んだ……

同じ部隊の同僚や部下、上司……もう誰も死なせまいと必死に戦って、抗って、血反吐を吐いて。それでも誰一人として守りきれず……皆死んで……自分も……

彼は——白銀武と言う青年は“この世界”とは本来無関係な人間だった。

平和で、何不自由なく、色んな仲間や幼馴染や優しく、思いやりのある教師と楽しく馬鹿をやりながら過ごす一人の学生であった。

しかし、その平和な現実突然に終わりを告げた。

ある朝目を覚ましたら、彼の家の周りは廃墟と化していたのだ。

しかも傍らには朽ち果てたロボット。これは夢だと納得させ、向かった先は毎日通う学校だ。

だが、着いた先は『国連軍横浜基地』

あれよあれよと連行され、彼の目の前にいたのは“元の世界”の物理教師『香月夕呼』先生……ではなく、国連軍横浜基地の香月夕呼

副指令だという。

それからの話は、まっとうな人間が聞けば病院を紹介されるのではないかという程荒唐無稽な話だった。

地球に降り立った侵略者BETA。奴等に対抗するために生み出されたロボット——戦術機。ここは日本ではなく日本帝國。歴史からして微妙に食い違いもあり、当初、白銀武は混乱していた。

この後嫌というほど思い知らされる。

“此処”は現実であり、逃げることは叶わぬ運命に自分がいるのだと…

「ふう…」

大きく息を吐き、気分を落ち着かせる。

『因果導体』

白銀武が、“圧倒的物量で人間を攻め滅ぼさんとする侵略者と戦う世界”をループするのはそんな訳の解らない物になったからだという。

BETAに捕らわれ、脳みそと脳髄だけにされた最愛の幼馴染が、白銀武に会いたいという一心の想いで起こした奇跡。

その奇跡はコレが四度目。

一度目は選民が宇宙に逃げ延び、残った地球で戦って散った。

二度目は日本におけるBETAの拠点、佐渡島ハイヴで決戦兵器と共に散った。

三度目は多くの仲間の命と引き換えに取り戻した佐渡島ハイヴから逃げ延びたBETAに襲撃された横浜基地を守って散った。

“この”白銀武の記憶では、まだオリジナルハイヴへとたどり着いてはいない。

だが、記憶を探ればいくつかの平行世界では、時期こそ違うもののオリジナルハイヴへの突入も果たしている。もっとも、その結果は惨憺たるモノではあったが…

「……あいつは完全じゃなかった……だからこそそのループ…か」

“前の”世界で死んでいった仲間たちを想い、目を閉じる。数秒の後、彼は自分の頬を両手で力いっぱい叩いた。

「うじうじしてても始まらない、今度こそ、今度こそは皆を死なせてたまるか!!」

内心では、いってー!!と悲鳴を上げたりするが、気合を入れて立ち上がる。

さっさと着替えて先生…副指令に会いに行こう。全てはソコから始まるのだから。

「あ、ゲームガイは持つて行くか。先生の気分転換にはなるだろうし」

着替え終わると机の上の携帯ゲーム機を制服の内ポケットに仕舞い込む。

部屋を出て、階段を降り、靴を履いて玄関のドアを開ける。

最後に一度だけ振り返り、彼は言った。

「行つて来るぜ…今度戻るときは…絶対ハッピーエンドで終わらせてやる!!」

強い意志を瞳に宿し、青年は再び過酷な運命の待つ荒野へと足を踏み出した。

*

「ふむふむ……他の世界じゃ俺は准将にもなってるのかー、なら教導官も難しくはないな…」

横浜基地へと向かう途中、白銀武は“他の世界”の記憶の確認をしていた。

一番階級の高いもので准将。

低いものでも中佐と中々に大活躍だったようだ。

まあどの世界でも最終的に敵の物量に押し込まれ、戦死しているの
で武からしてみれば大活躍どころの話ではない。

『英雄』などと呼ばれた世界もあるようだが、今の武に受け入れられるモノではなかった。

「どうせ一人で出来る事なんて限られてるんだ、力を借りるぜ、俺」

様々な世界の白銀武がその言葉に同意したのであろう。

自分の中に揺るがぬ『覚悟』が形成される。

過酷な任務も、非常な命令も受け入れる覚悟。

仲間の為に、どんな汚名も着る覚悟。

そして、ソレが必要ならば、仲間に『死ね』と命令する覚悟。

「誰一人死なせないなんて…我ながら矛盾してるな……」

思わず苦笑が漏れる。

だが思う。ならばそんな命令をしなくてもいいように鍛えるのだ。

自分を、仲間を…どんな苦境に立たされようがねじ伏せられる力を、

自分の全てを持って鍛えぬくのだ。

そうして笑顔で終わらせればいい。

そこまで考えて、武は足を止める。

この坂を行けば基地の正門。

その前に彼はやることがあった。

「多くの散って行つた英霊達…貴方達に誓う」

正門の桜並木。

BETA大戦で散って行つた幾多の衛士達。

―さぞ無念だったろう。

―さぞ悔しかったろう。

―どれほど恐ろしかったろう。

―どれほどBETAを憎んでいただろう。

祖国を想い、友を・親を・恋人を想い、志半ばで果てた先達。
武は並び立つ彼らを正面から見据えて、敬礼の姿勢をとる。

「必ず、必ずBETAに勝利して見せます。俺は…俺達は負けませ
ん！！！！」

一陣の風が吹き抜けた。

武には、ソレが先達からの激励のように思えて、胸が熱くなるのだ
った。

*

【白銀武が自室で目を覚ましたのと同時刻】

何やらまぶたが刺激されている気がする。
ちかちか光が差し込んでいる。

っーか眩しい。

何処からか風が吹く。

やけに寒い。

ぼんやりとだが意識が覚醒してくる。目の前に広がるのは空。明るいと思っていたのは電球の光ではなく太陽の光だったのだ。そりゃ眩しいだろう。

周囲を見渡すと焼け野原というフレーズがぴったりの光景。てか廃墟だな…

おかしい…自分はベッドで寝ていたんじゃないのか？

ん？最後に見たのは部屋の天井だったか？

「なんだこりゃ…」

意識は完全に覚醒した。

どうも自分は瓦礫の上でぐーすか寝ていたらしい。

よくそんな所で爆睡が出来たもんだと我ながら感心する。

「うへー、酷い有様だねエ」

再び周囲を見渡す。

廃墟・廃墟・廃墟…

何処をどうやったらこんな事になるのか是非とも責任者に問いただして見たいもんだ。人の気配など微塵も感じないし、見える範囲でも草木が全くない。

元が都会だとしても、さすがに多少の草木はあるだろうに。

「…マジで此処何処よ？」

とりあえず聞いてみる。

うん、答えは返ってこない。

分かってはいた事だが、少し悲しい。

幸い、というべきか服は着ていた。

色落ちの激しいジーンズに紺色のタンクトップ、ボロいがお気に入りの黒のパーカーだ。

少しばかり違和感を感じて自分の身体を撫で回す。

人目があればただの変態だ…もつともこんなところに人がいるとは到底思えないが。

「おお…ムキムキだなオレ……」

服の上からとは言え、鍛え上げられた筋肉がよく分かる。

無駄なく鍛え上げられ、引き締まった自分の…それでいて他人のよ
うな身体。

なにやら沸き出るかのごとく充滿している体力。

そして————流れ込んでくる『平行世界の記憶』

それらの全てを受け取って、彼は口元に笑みを浮かべる。

「“ループ”…ねエ…また化け物相手に戦い合えってか」

呼び込まれた異邦者…因果の鎖に絡められた存在。
だが、本来ならばソレは白銀武のみであり、他はいないはずであつた。

何故なら、白銀武を呼んだのは最愛の幼馴染。

彼女のただひとつの願いが生み出した奇跡。

悲しくも深い愛の絆が、特定条件下とはいえ次元の壁を越えさせたのだ。

だから有り得ない。

“彼の存在”は有り得るはずがないのだ。

「まーた帝國軍に連れて行かれるのは勘弁して欲しいところだが…」

三度周囲を見渡す。

体力は有り余っている。走って回れば少なくとも此処が何処であるかの手がかりはつかめるはずだ。どうやら此処は戦場でも前線でもないようだからイキナリBETAに襲われることは無いだろう……
…多分。

少しの屈伸運動とストレッチで身体はほぐれた。

後は走り出して答えが見つければ御の字だ。

「出来れば……最初にアンタに会いたいモンだぜ……」

空を仰ぎ見る。

憎らしいほどの快晴で、今までとは違う『何か』があるのだと予感させる。

「この街の何処かにいるんだろ？」

ソレは確信めいた呟き。

『今までと違う』 始まりが彼をその思考へとたどり着かせた。

優しいな笑みを浮かべ、まるで十年來の友人に聞かせるかせるかの
ように彼は言う。

「なあ……白銀武……」

世を哀れんだ神の奇跡か。

それとも悪魔の悪戯か。

運命の道に、戦士が集う。

動き出す『因果』（後書き）

次回『再会、横浜基地にて』

この邂逅は、彼等に何をもたらすのか。

再会、横浜基地にて（前書き）

魔女の剣となるべく、“英雄”は進む。

再会、横浜基地にて

坂を上ると見慣れた風景が広がった。

『極東国連軍横浜基地』の懐かしい景色について表情が緩んでしまう。白銀武は大きく頭を振り、真剣な面持ちで正門へと近づいていく。その先には二人の門兵。談笑を交わし、武の事など気にも掛けてないようだった。

（この時期はまだ空気が緩んでるんだな…）

苦い記憶が浮かび上がる。『前の』世界で基地副司令が引き起こした最悪の人的事故『トリアル事件』。最前線の基地でありながら、その中でも後方にある事に基地の人間のは安心しきっていた。その緩んだ意識を叩き直すため、捕獲したBETAを暴れさせ、衛士たちに“ココも”前線であると再認識させたのだ。

多くの人間と多くの戦術機が失われ、武もまた恩師を失った悲しい事件。

けして肯定できるやり方ではなかったが、アノ後から確かに基地の空気は変わった。そうしなければ変わらなかったというのも残念な話ではあったが…

「随分と楽しそうだな？」

口から出た言葉は思っていた以上に冷たかった。

思い出した所為か、知らずの内に視線も鋭いものへと変わっている。

「「！！！？？」」

急に――ではないのだが――現れた青年に門兵は一樣に驚いた表情を浮かべた。

訓練生の服装（白稜袴の学生服だが）でありながら、その視線は研ぎ澄まされた刀のように鋭く、全身から溢れ出る威圧感まるで将官のソレに近い。

知らずの内に彼らは直立不動の姿勢をとっていた。

「え、えーと外出から戻られるのでしたら許可証と認識票を提示してください。」

思わず敬語だよ。

いまだおたおたする二人を前にして、しかし武はきっぱりと言い放つ。

「悪いが無い。俺は副司令の任務のためにココに来た。」

驚愕、そして怪訝な表情。

仕方の無い話だろう。そんな報告は受けていないし、第一はつきりと許可証も認識票も無いと言い切ったのだ、少なくともこの基地の人間ではないのだが。

ならば何故彼は此処の訓練生の格好をしているのだろうか。

「まずは香月副司令に話を通してみてくれ。その際に必ず“理論の間違いを正す者”と付け加えてな。」

しづしづといった様子ではあったが片方は通信機を使い、何やら報告をし始め、もう片方は緊張した面持ちで武に小銃を突きつけている。入念にボディチェックもされ、武器の所持も無かったため、一

応は問題無しと判断されたようだ。
それでも小銃は突きつけられてはいるが、まあたいした問題では無い。

二人程度ならば瞬殺出来るほどの実力が今の武にはあるのだから。

通信をしていた門兵は何度かこちらを見て、ゆっくりと近づき通信機を武へと差し出す。

「副司令が話したいそうだ。」

食いつきは思った以上に早かった。

そうだ、このころの香月夕呼は理論に行き詰まり焦っていた。後一步の壁が越えられず、追い詰められていたのだ。

人類を救うという使命をたった一人で抱え込み、外道畜生と罵られても何食わぬ顔で研究に邁進し、一切の妥協も後悔も許されない。今の彼女は藁にでも縋りたいのだろうか……ソレを白銀武が知る事は出来ないし、許される事ではない。今はただ、持てる全てを使い彼女を支えるだけだ。

『アンタ、何者？』

受け取ってから、第一声がソレだった。
恐ろしく不機嫌な声。

—どうしよう、すげー怖いんですけど

ちよつとだけ挫けそうになるが此処で躓くわけにもいかず、武は気合を入れなおす。

「こんにちは、香月夕呼副司令。俺は白銀武と言います。」

『しろがねたける？知らないわね、そんな奴。』

一刀両断。

そりゃそうだ、“こつち”の世界じゃ接点なんかあるわけない。

「俺は、貴女が必要とする理論を持つてきました。人類の勝利のためです。宇宙に逃げるためじゃない。」

『っ!?!』

「大切な人を…純夏を…護るために来ました。」

『知って…いるのね…』

どこか諦めたような声。

知らぬふりをされたら、まだ出せる情報はある。

だが、武には確信が在った。コレで、この人は信じてくれると。

嘘偽り無い真実の言葉。半信半疑ではあるのだろうが、きっと会う事を選択してくれる。

「知っています。俺は…全てを。」

そう。

一言だけ呟いて、無言。

先に沈黙を破ったのは夕呼だった。

『いいわ、迎えを寄こすからついて来なさい。』

「ありがとうございます。」

それだけ言って夕呼は通信を切った。

武は小さくガッツポーズをして、門兵に歩み寄り通信機を返す。

それからしばらくの後、迎えに来た金髪の女性―イリーナ・ピアテ
イフに案内を受けて、武はようやく横浜基地の中へと足を進めるの
だった。

*

「あーやっぱり横浜かよ。」

ソレを見つけた瞬間、そんな事を口走っていた。

咲かせる事の無い桜並木。

その先に聳え立つ基地。もしや？と思ってはいたがようやく確信に
いたった。

そのために街中を随分と駆け回ったが、たいした問題ではない。疲労は別段感じないし、呼吸させ整えれば汗は引く。まあ空腹だけはどうしようもないが、そう……たいした問題ではなのだ。

果たして今が何年の何月何日は分からないが、此処が横浜であるという事実に比べれば、彼にとってその他の事はなんら問題にはならなかった。

始まりの地が横浜。

ならば、きっと全てが揃っているのだ。

『英雄』と呼ばれる彼も、『魔女』と呼ばれる彼女も。

「会ってみねー事にはわかんねえか。」

ゆっくりとした足取りで坂を上る。

桜並木をぼんやり見ながら、ソレに纏わる話を思い出していた。

散った英霊の墓標……だったか？

まるで彼らから品定めをされている気分だった。
自分は凡そ衛士には不向きな性格だろう。

―世界のために

―国のために

―隣にいる誰かのために

命を掛けて戦う事に疑問は無い。
なぜなら此処は“そういう世界”なのだから。

散っていった者達を否定する気も無い。
なぜなら彼らは誇り高く逝ったのだから。

だが、いまだ彼はその根底は理解できないでいる。
命を掛けて護る存在が彼には無い。

「大丈夫、半端はしないさ。」

片手を挙げて桜並木に別れを告げる。

誓うのはそれだけ。後は結果で判断してもらえればそれでいい。

上り終えた先には基地の正門。

“彼”の姿を確認して、門兵二人が小走りに寄ってきた。

―ご丁寧に小銃を構えたまま……

（なんぞこの警戒は！？）

「おい、お前この基地の人間じゃないな？」

第一声がソレか…

間違っではない。この基地の人間ではないし、この基地の関係者でもない。

一般人がこんな所に来るのはそれこそ不自然な話だ。彼はふむ。と思考を巡らせる。

（やつべーな、流石に撃ったりはしないだろうが…… “また” 捕まるのは勘弁してほしいぜ…）

通信でなにやらやり取りをしつつ、じりじりと距離を詰める門兵二人。

結構まずい状況ではないかい、コレ…

仕方が無いので切り札を一枚切る事にしよう。『英雄』が横浜基地に“今”来ているかどうかは分からない、しかし『魔女』ならば必ずいるはずだ。此処は『魔女』の拠点であり研究所でもあったはずなのだから。

「なあ、香月副司令いる？」

「「！！！？？」」

お、この反応ビンゴ！！

すっかり分かりやすい二人だ… 門番変えたほうがいいんじゃないのか？

「おい…… “お前も” か？」

「お前“も”……?」

怪訝な表情の『三人』。

再び門兵ズは通信でひそひそと話し始める。

「……香月副司令に話がある。」

ハッキリと、強い意志を持って彼は言い放った。

「頼む、時間も無いんだ……アノ人の研究を終わらせるわけにはいかねえんだよ!」

【香月夕呼に關係する事は全て報告せよ。】

横浜基地の入り口を護る時に伝えられた絶対厳守の命令。

ならばさっきのように一人が銃を構えて警戒、もう一人が報告をすればいい。もし香月夕呼が切って捨てたのなら彼は牢屋行きだ。

「いいだろう、報告を通してやる……お前は何か伝える事は無いのか?」

通信機を構え一人が聞いてきた。
彼はしばらく考えた後――

「白銀武と共に戦いに来た。」

そう言って、笑顔を浮かべた。

*

「なるほど……仮説まできっちり立ててあって中々面白い話ね。」

地下19階フロア。

自分の執務室で香月夕呼は目の前の青年――白銀武に拳銃を突きつけたままにやりと笑った。

基地の中に案内してもらってから3時間近く検査を受け、武はようやく夕呼との面会に漕ぎ着けていた。

部屋に入って早々に銃を突きつけられ、知っていることを洗いざらい喋れと言われたのだ。まずは自分がどうして此处にいて、全ての情報を知りえたのか、という話から始まった。

自分はこの世界の人間ではない事。気がつけばこの世界にいた事。学校が国連軍の基地になっていて、そこで夕呼に拾ってもらった事。“最初の世界”では、夕呼は第四計画を完成させられずに12月24日に第四計画が凍結、その後第五計画が発動した事。自分は地球に残って戦って死んで再びループしてきた事。

“次の世界”では何とか第四計画の完成に漕ぎ着けたが佐渡島ハイヴ攻略時にXG-70と共に散った事。

“三度目の世界”ではなんとか佐渡島ハイヴを攻略したが、巢を失ったBETAが横浜基地地下のハイヴに攻め入り、防衛戦で散った

事などを事細かに話した。

途中で夕呼から、『何故ループするのか』と質問されたが『因果導体』という単語を聞くと納得したらしく、その後の話はただ黙って聞くだけであつた。

「鑑純夏の思念とG弾の高重力潮汐力の複合作用、ソレに共鳴した反応炉：大量のG元素と引き換えに現れたアンタ：感心するぐらい面白い話だわ。」

貴女が立てた仮説ですしねー。とは武は思ったが口には出さなかつた。

思うところがあつたのか、夕呼は銃を下げ、床に放り捨てる。

「私が立てた『因果律量子論』とも被る内容もあつたし、少しは信じてやってもいいわね。」

で。と口元に笑みを浮かべたまま、視線で武を貫く。流石にもう怯んだりしないが、中々に迫力のある眼力だ。コレで科学者といふのだから恐れ入る。

「アンタの目的は？」

「オルタネイティヴ4完成をさせ、BETAに勝利する事。」

そして――

「仲間と純夏を護りたい。」

「言つわね……」

「はい。そのために理論も覚えたんです。」

がたっ！！と夕呼が立ち上がった。目は丸く見開かれ、口はあんぐりとあいている。貴重なシーンだ、忘れないようにと武は心に誓う。

「正確には“別の平行世界”の俺が必死に勉強した知識が俺の中にあるんです。夕呼先せ…じゃなくて副司令の雑用とか助手の真似事してたので00ユニットを完成させた数式も役に立つから、と言って覚えさせられました。」

それが事実であれば早い時期から人類は攻勢に転じる事が出来る。目の前の青年の表情は真剣そのもので、嘘をついているようには見えないし、その誠意も伝わってくる。夕呼を震えるほどの感動が包み込んだ。

「アンタ最高よ！！しろがー」

ビービー！！

ひゃっほーい。と言わんばかりに飛び上がり、武に抱きつこうとしたその時、執務室の通信機から音が鳴る。

しかもこの音は彼女の副官であるピアティフからの緊急通信だ。一瞬で真剣なソレに表情を変え、だがどこか不機嫌そうにボタンを押して通信をオンにする。

そのまま通信を始めた彼女だが、なにやら様子がおかしい。しきりに武の方を気にして会話をし、時折浮かべる怪訝な表情。

なんだろう？と考えていると通信が終わったのか夕呼が近づいてき

た。

「白銀、アンタ素手の實力は？」

なんだろうこの質問は。

いたって真面目に聞いているようなので、真面目に返すほか無い。

「自分で言うのもなんですがかなり強いですよ、素手なら俺に勝てる奴はそっいないかと。」

様々な世界で鍛え上げた『白銀武』の集合体だ、流石にBETA相手は無理だが人間相手なら遅れをとる事はまず無いといっていいだろう。

「なら安心ね。」

そう言つて夕呼は革張りの椅子に腰を下ろす。

その視線は武に向いておらず、唯一の出入り口であるドアに向けられていた。

「今から人が来るわ。そいつが少しでも怪しいそぶりを見せたら―」

一度だけ視線を武に。

「殺して頂戴、ソイツ。」

「―っ!？」

本気だ。

彼女は本気で武に言っている。

今から来るであろう人物の検査は、至極簡単なものだったらしい。武器の所持は無いが、体内に爆発物や細菌兵器は埋め込まれていないか。ただのそれだけ。

自分の時の検査が不満だったと言うわけではない、それにしても、ソレはおかしいのではないかと武は思う。

自分を信頼してくれているのだろうか、だから警護を自分に任せたのか。

考えても答えは出ない。ならば、今は任された事を実行するのみだ。人を殺す事になるのは大いに抵抗があるがここで香月夕呼という人物を失うわけにはいかない。

自分の立ち位置を夕呼の隣に移して待つ間、武も一度だけ夕呼を見る。

ある予感がした。

彼女は、香月夕呼は、『ソイツ』を俺に会わせる為に呼んだのだと。

シュ。と短い音を立てて度が開く。

「っ!？」

そこに立っていた人物を見て、武は息を呑んだ。

“最後”に自分が会ったときよりも遥かに若い。
だが、解る。

『彼』を自分は知っている。

夕呼が武を見ていた。

やはりか。そう言いたげな表情で。

彼は笑顔を浮かべていた。

自分と、香月夕呼を見て。本当にうれしそうな笑顔を浮かべていた。

「伍江……宏輝……」

武は呟く、『彼』の名を。

「お久しぶりです、香月副司令。」

そして――

「久しぶり、白銀武。」

集いし戦士の運命は

これより更に加速する

再会、横浜基地にて（後書き）

次回『二人の衛士と戦乙女』

八人の戦乙女。

かつてはいなかった者も、其処に。

二人の衛士と戦乙女（前書き）

かつての仲間との再会、其処にはいなかった者たちの姿も。

二人の衛士と戦乙女

< 伍江 宏輝 >

声を掛けた二人の反応は、予想通りだといっても言い。

武は何か信じられないものを見るような、香月副司令は『誰あんた？』とでも言いたげな顔だ。

まあ仕方ないっちゃ仕方ないわな。

なんせ副指令は俺と初対面になるわけだ、素性の知らない人間から久しぶりと挨拶されても胡散臭いだけだろう。

武とは“前の世界”での顔なじみな訳だが……覚えてくれててよかったぜ。

— シラネ（、A、）

なんて顔された日には流石に泣けてくる。

しばらく俺を睨みつけていた香月副司令だったが、ため息を吐き、視線を武へと移す。

「やつぱりあんたの知り合いだったのね」

最初に名前を出したのは間違いじゃなかったか。頷く武を見て自分の勘に感謝だ。

「話が早くて助かりますよ、俺としては」

「いつえ……って言ったかしら、あんたの目的は何？」

視線がキツツイなー。

信用にはまだまだ遠いねー。分かってはいた事だけど、これから頑張るしかないか。

「まあ言っちゃえば人類の勝利って奴ですね。敵を目の前に逃げるってのは性に合わないモンで」

「ふーん、大層な目的ね」

「いえいえ、ソレ意外にする事が無いだけですよ」

あははははー、って笑っては見るけど更に視線がキツくなるだけ。空気呼んでないね、俺……

隣にいる武は引きつった笑いを浮かべてるし。分かってんだよ、場にあってねー事ぐらいは。

「で、あんたは何かあたしに提供できるモノはあるわけ？」

「あーそうですねー、00ユニットに関する資料は無理です。ってか武がいるなら正直俺の出番はないわけで」

「……………」

余計に視線がキツくなっちゃたよ、おい！！
つかここで嘘をついたってどうしようもないわけで……
どうせすぐばれるし、開き直るが吉でしょう。

「衛士としての腕は一流ですよー、“前”は大佐の階級ももってま

「したし教導も一流です」

「あー副司令、ソコはオレも押します」

「お、ナイスフォローだ武!!」

「いいぞ、もつと言え!!」

「提供できるモノも無いくせに理論がどうか言っただけね?」

「通じてねーよ……」

「なんか胡散臭さだけ飛躍的にあがった感じがしないでもないな。」

正直、香月副司令の理論が間違っている。と言う事しか俺は知らないのだ。ソレは“前の世界”で散々愚痴として聞かされている。とはいえ俺が如何こう出来る問題じゃなく、全て武とウサギっ娘に任せていたわけで。

完成はしたから、上手いことやっただろうなーってぐらいだわな。提供なんて思い上がりも甚だしいわ……サーセン。

「まあ理論に関しては白銀が提供できるからいいけど……衛士の腕前が一流つてのは疑問よね」

「そっちに関してはマジで自信ありますよ?」

「…マジ?」

「ああ、本気って意味ですね」

しまった、コレは通じないんだったか。

そっぴや“前”も『白銀語』とか言われて、?ってなった記憶があるな。

言葉にしても遊びが無い状況なんだっけ。気をつけねば。

「夕呼せ…香月副司令、どうせならシミュレーターでお見せしましょうか？」

恐る恐るって感じたが、武がうまい事言ってくれて助かるぜ。まあ副司令が提案に乗ってくれなきゃ意味ねーんだが。

「そうね。そこまで言うなら見てやろうじゃない」

美人なのに、ニヤリって笑顔は怖すぎます……
だけど、コレで首の皮は繋がった。と信じたい。

「で、白銀。さっきから先生って呼びそうになってるけど、何ソレ？」

「“元の世界”じゃ副司令は物理の先生だったんですよ。その癖が抜けて無くて」

ふーん。と興味なさげなご様子。

単に気になってただけか。即疑問解消に行動するあたり流石は研究者ってとこだな。

頭に超一流って付けないと、怒られるんだっただか？

「ま、好きに呼んだらいいわ。準備が出来次第行くわよ」

なにやら通信でシミュレーターデッキの貸切と管制の人間を手配し始めた副司令。

ソレを確認しつつ、武が俺の真正面へとやってきた。

こうしてみるとこの白銀 武は若い。

たしか出会ったときはこいつ26ぐらいじゃなかったろーか？そこから5年エレメントを組んで戦場を駆け回ってきた。覚えてるのは年下のわりにやけに頼りになる笑顔と厳しくも優しい教導官の顔だ。『英雄』という二つ名を与えられ、泣き言を言わず、求められる結果を叩き出す日々。俺と二人のときは“元の世界”の話で盛り上がりもしたが、こんな。言ってしまうえばガキ臭い武を見たのは初めてだった。

「まさか宏輝がいるとは思ってなかったな」

「まー自分でもよくわからねえよ。いつもは帝國軍に捕まってたしな」

「じゃあ今回は『特別』ってわけか？」

「だろうな、始まりが横浜ってのには意味があるんだろうぜ」

ふむ。と武が考え込む。

下手な考えは休むに似たり。だけどな。

「あーところで今日の日付ってわかるか、武？」

「ん？2001年10月22日だろ？」

「何言ってるの、あんた達」

通信が終わったのか、副司令が怪訝な表情で俺たちを見ていた。

あの口ぶりからすると日付が違うのか？

少なくとも俺と武は今日が2001年10月22日だと思って行動

していた。

今までがそうだったしな。

時間がずれてるのか、今回は……んなことあるのかよ…

「今日は5月22日よ、2001年つてのには間違いはないわ」

思わず顔を見合わせる俺と武。

ナニコレ、前倒しになってるのか!?

「じゃあ207分隊は総戦技演習は――」

「まだね」

これに驚いたのは武だった。

正直俺には何の事かわからん。

207分隊が意味するところは知らないし、正直日付が前倒しになつてるのは、計画的に問題無しなんじゃないか。ぐらいにしか理解が出来ないからだ。

あと何かしら意味があるとすれば……俺の誕生日ってことか？

余計関係ねーじゃん。

「何よ？問題でもあるの？」

「いえ、特に無いッス」

何か言いたげな武を手で制してそう言っておいた。

コノ件に関してはあとで話し合ったほうがいいだろうな。

俺に抗議の視線を視線を向ける武はこの際無視だ。

とりあえずは衛士としての有効性を見てもらうとしようじゃないか。

「じゃあ行くわよ。たいした腕じゃなかったら…分かってるんでしようね。伍江」

あれ？俺だけ？

不服そうにしてるのがバレたのか、副司令は一度だけ俺を見て。

「だって、白銀は理論回収してからでも消せるからね」

そんな事を言いやがりましたよこの人！！

とはいえ、俺が副司令の立場でも同じ事言うかもなー。

だって理論云々は実際に確認してからでも遅くはないし、操縦技術がお眼鏡に適わなけりゃ、俺はここにいる意味が無いわけだし。

隣に目をやれば武は冷や汗をかいてるようだった。

理論、ちゃんと出来なけりゃお前もお払い箱だしな。

せめて衛士としては役に立つとこ見せねーと！！

部屋を出て行く副司令を追いつつ、俺は死なないように意気込むのだった。

<白銀 武>

シミュレータールームについて早々に強化服に着替えさせられ、オレと宏輝は機体の中に放り込まれていた。

管制室には夕呼先生と、先生が呼んだピアティフ中尉の姿。

優秀な彼女にCPをやってもらうのは正直ありがたい。無しでもヴオールク・データ難易度Sランクはクリア出来るのだが、いるといかないとはその差は歴然だ。

これでコッチは進む事だけに専念が出来る。

『装備はどうするよ、武』

バストアップが網膜に映し出されて、楽しげな宏輝がそう言うてる。

まあオレとこいつの連携を見たらきつと夕呼先生も驚いてくれるだろう。

その確信もあつて楽しそうなんだろうな。

「オレは突撃前衛だな」

『ふむ…んじゃオレは強襲前衛にでもしとくか』

オレとエレメントを組んでいたときは、勿論突撃前衛装備ではあつ

だが、本来の宏輝は銃撃戦が得意分野だ。
剣戟戦闘もかなりの実力でこなすが、まあ夕呼先生に見てもらうのだから少しはいい格好がしたいんだろう。
てか実力見せなきゃ首切られるわけだし、あいつが躍起になるのも当然っちゃ当然か。

ソレはそうと――

「なんでお前“撃震”なんだよ……」

なんとなく予想は付くけどな。

初めて会った時に鼻息荒く言ってるのを思い出した。
コイツ確か――

『カツコイイじゃん、撃震』

やっぱりか……アノゴツイ見た目が気に入ってか、せっかく配備された不知火にはしばらく乗ってなかったけ。
いくら腕がいいとは言ってもソレはソレ。
流石に第三世代機とはスペックは比べるまでもないんだけど。

「ソレでヴォールク・データ自信満々なのは多分お前だけだぞ」

撃震だと中層突破はちよつときついだろう。

オレが不知火選んだんだから機動の差は歴然だ。
へたすると置いて行ってしまう可能性だってある。
分かっててやってるあたりタチが悪いよな――

『まあ久しぶりってのもあるしな、まずはコイツで慣らしておかねーと』

感覚では、オレと宏輝がBETA相手に戦ってたのはつい昨日だ。でも、だからと言って身体が付いてくるとは限らないってわけかなんだかねだとよく考えてる……のか？

『あんた達、準備は出来たの？』

つと、夕呼先生の機嫌が悪くなる前に始めるとしますか。

宏輝に目で合図をして互いに最終確認を行う。

正直、撃震だとオレの不知火についてくるのはほぼ不可能と言わざるを得ないけど、そこはまああいつも頑張ってくれるだろう。

「こちら白銀、いつでも行けます」

『伍江、何時でもどうぞ』

『了解。開始まで…5…4…3…2…1…状況開始』

CPの管制を受けて一気に飛び出すオレと宏輝。機動性能の遥かに劣る第一世代機でついてくるのは流石って所だな。

接敵の報告を受けてカメラを奥にズームさせれば津波と表現が出来る程のBETAの群れ。

ハイヴの中だけあって際限も無さそうに見える。

「一気に行くぞ、遅れるなよ!!」

『了解!!』

噴射跳躍で敵陣のど真ん中まで飛び込み、足場の確保に最低限の敵だけ排除して再び跳躍！！

後方では、脅威度の高い敵を宏輝が突撃砲で蹴散らして行く。相変わらず判断の早い事で、攻撃態勢にはいった奴だけ綺麗にふっ飛ばしてるあたり腕はそう鈍ってはいないみたいだ。

天井から落ちてくる敵は極力空中で回避して着地。勿論密集の薄いところを狙い、無駄な戦闘はなるべく避けるように心がけている。

ハイヴ内での戦闘は出来る限り避けたい。

弾薬には限りがあるし、長刀にだって耐久度はある。

補給もままならない敵の巣の中で戦闘を繰り返してたらその先に待っているのは“死”だけだ。

目的は反応炉の破壊。

なら無視できる相手は無視に限るぜ。

『敵増援、数およそ2万。距離は2500。』

「何処にそんなに隠れてるんだか」

ピアティフ中尉の声にデータを確認してみれば、先の通路が真っ赤に染まりつつあった。

最大の脅威はその物量。よく言ったもんだ。

『突っ切りますか？隊長。』

「援護は任せた、遅れるなよ？」

了解。と楽しそうに宏輝が言う。
気持ちは分かる。

オレも楽しいんだ。オレの起動についてこれる奴なんて多くはない。
い。

“前の世界”でA0-1の皆が死んでしまっ
てからは余計にそうだ
った。

エレメントを組む相手もいなくて、こいつを見つけたときには本当にうれしかったんだ。

「行くぜえええええ！！」

フットペダルを踏み込み、オレは敵陣の中へと機体を躍らせていった。

<伍江 宏輝>

「化け物ね、あんた達」

見事くりあゝ！！

賞賛の嵐か？とシミュレーターデッキから降りた俺と武を待っていたのは、完全に呆れ顔の副司令だった。

頑張ったのにほめ言葉ももらえないとは…
てか化け物とは酷い言われようだな。

「まあこれで実力は分かってもらえたと思いますけど？」

「そうね、最強の駒を二つ手に入れたって事でいいのかしら？」

お、お眼鏡に適った様子。

特殊すぎる三次元機動に数を物ともしない戦闘力。

自信はあったけど、そう言ってもらえればこっちも助かるわな！。

「じゃあ俺の首の皮は繋がったままってことですか」

「ええ、まあね」

なんで俺を見る目はそんなに冷たいんすか…

まあ強い衛士が一人二人いるぐらいじゃ戦局ががらりと変わるわけじゃないしな、強いに越した事は無いけど連携も重要な要素だし。

それで言えば各部隊とか国にはエースがいるんだから、戦況が変わっていない事を見ると物量ってのは偉大だな。

俺は出来る事やるしかねーよな。他に協力できる事なんてないんだもん。

「夕呼先生、俺たちのここでの扱いってどうなるんですか？」

世話になる事はもう決定事項って事で、武がそんな事を尋ねていた。流石に訓練兵からって事は無いだろうから、少尉権限ってところか？

捕まっ て拷問食らうよりはそっちが全然マシだよ。
帝國は酷かったからな……

「そうね…… ピアティフ!!」

管制室から荷物を抱えて出てくるピアティフ中尉。
さっきは管制お世話になりました!。

でも俺と武の三次元機動戦闘に呆けてて、敵増援の報告を忘れてたのは内緒の話だぜ?

「こちらがお二人の制服と用意しておいた着替え等になります」

「どもども。」

なんだかんだと準備のいい。
ここに来る前に副司令が通信してたのは知ってるけど、こんなものを用意してくれていたとは。
階級章はいくつか準備だけしてあって、俺たちの腕を見た後に決める予定だったのか……

とりあえず受け取って階級章を確認してみると……

「お? 大尉…… だと……?」

なんかやけに好待遇じゃね?
アレだけでコノ階級はやりすぎでしょ。と武に視線を移せば。

—— 少佐の階級章が…

よく見ると、苦笑いを浮かべているあたり本人もびつくりなご様子。つっても俺は納得だつたりする。

確認はしてないが、てかするまでも無いが、間違いなく武は副指令の必要としている理論を覚えてきている。衛士の腕も俺よりも遥かに上だ。

今現在、コノ世界で白銀 武に勝てる衛士なんて存在しないだろう。なんたつて経験値が違いすぎる。

出撃回数とか三桁こえるんじゃないかなーか。

あと、素手でも武に勝てる気まつたくしないし……

「感謝しなさいよねー、階級が高ければあんたたちも動きやすいでしょう？あとあんた達には高度なセキユリティパスも渡しておくわ。呼び出すのに便利だしね。」

あーなんだこれ、雑用係フラグか？…

でも階級云々は確かに一理ある。

いきなり基地に現れた俺たちだけど、階級が高けりや難癖つけたりする奴なんていないだろうし、仮に聞いてくる奴がいたとしても『ソレは秘密です』って言うておけば追求は出来ないだろうから。

ちなみにアノ台詞言うときはウインクして人差し指立てるのがポイントだ。

副司令の事だから他にも思惑があるのかもしれないけど、貰えるものはありがたく受け取っておこう。

「個室はすぐに準備させるけど明日になると思うわ。それまでは二

人部屋で我慢なさい」

「至れり尽くせりですねー」

そついうと副司令は俺に視線を移し――

「これから死ぬほど働いてもらうから別にいいわよ」

なーんて言ってくれました

やさしーなーふくしれーはorz

「先生、ちよつといいですか？」

「なによ」

めんどくせー。と言わんばかりの表情で副司令は武に向き直る。
顔を上げれば真剣な顔で彼女を見つめる武。

「俺と宏輝にA―01と207分隊を鍛えさせてください」

俺に相談もなしにそんなこと言うか!?

いや、教導には一応自信はある。“前の世界”じゃ教え子達は揃って『死の八分』を乗り越えて、周りから異常なまでに戦死率が低いつて評価を受けてたし、ソレは武が受け持った部隊だって同じだ。帝國や欧州なんかに教導で出向いた事はあるしな。

でもそりゃあくまでも新兵とかの話だぜ？A0-1ってかなり腕の立つ連中だったはずだ。彼女達の話なら武からよく聞かされたから覚えてる。実際会った訳じゃない、その頃は武以外は全員戦死してたし。

劇的に腕が上がるなんて事がないくらいあいつにだって分かりそう

なもんだがね。

「……A―01みたいに、完成度の高い部隊の教導をあえてやる理由は？」

「早い話、今のままでは彼女達はいずれ戦死するからです」

人員損耗率が異様に高いって話か。

かなり激戦区だったり、過酷な任務ばっか与えられるから致し方ないんだろぅが……

よく見ると副司令は不機嫌そうに眉を顰めていた。

彼女だつて好きで過酷な任務を与えてるわけじゃないんだろぅ。何かしら理由があるとは思ぅが、俺が知っていい事でも無さそうだ。

武は理解したうえで戦死者を出さない努力をしようとしてるんだしな。

「副司令、俺からもお願いします。部隊の戦力の底上げは後々役に立ちますよ？」

「例えば？」

「通常の戦闘もそうですが……やっぱりハイヴ突入ですかね」

「そこまで見据えてるわけね？」

「アレ潰さない事には、本当に際限なく奴らは来ますから」

しばし無言で考える副司令。

答えが出るまでは早かった。

「いいわ。A - 01は今、模擬戦闘訓練で出てるから終わり次第ブリーフィングルームに集めてあげる」

ありがとうございます。と頭を下げる俺と武。

「でも207分隊にはまりもが付いてるわよ？解任させるの？」

頭の上からそんな言葉が投げつけられる。

まりも？誰それ？

俺がすっかり覚えてないだけか？

「いえ、神宮寺軍曹はそのまま教官を続けてもらいます。彼女ではB分隊のしがらみは、流石に取り除けないでしょうから。俺と宏輝はあくまでも補佐です」

「“問題児”ばかりだから……ってことかしら？」

問題児ねー。武が教官なら修正一発でどうにかなりそうだが……出来ない理由でもあるんかね？

だからこそその補佐って事か……しかも俺までって…

「ま、いいわ。とりあえずA0 - 1が戻ってくるから先にブリーフィングルームに行ってなさい」

『了解！！』

二人揃って、びしっと敬礼を決めるが――

「ああ、そういうのあたしの前では無駄だからいいわ」

なーんて言われちゃいました。

*

連絡とか始めた副司令を置いて、一足先に俺と武は執務室を後にしていた。

出て行く間際に「あんたたちの部屋に研究機材を少しだけ運んでおいたから、白銀は理論まとめて明日の朝一で持って来なさい。」なんて言われて武は神妙に頷いていた。

理論の完成!! 人類の勝利ヒャッホイ!!

って感じだろうから確かに早いに限る。

とはいえやはり向かう場所は戦場で、やることは戦争だ。戦死者は出るだろうから樂觀も出来ん。

と、薄暗い通路のど真ん中で、いきなり武は足を止めた。

「忘れ物か？」

俺の言葉は無視。

視線は横に伸びる通路の奥に向けられている。

俺から武の表情は分からない。

嬉しそうな、懐かしそうな。それでいて悲しそうな。厄介な雰囲気であることは確かなんだが。

「悪いな、行こう」

「いいのか？」

「ああ、“今”は…な」

釈然としねー。

行きたけりゃ行けばいいんじゃないかと俺は思うわけだが。武には何か考えあつてなんだろうな。

追求もやめておくか。“今”は。って言ってるんだし、明日顔を出すつもりなんだろう。

ちなみに、俺達の服は既に国連軍の制服に変わっている。

シミュレーターが終わったあとに着替えておいたのだ。

なぜか無言のままエレベーターに乗り、そのまま目的地を目指す。

く…空気が重い…

目的地に着いたのはいいがまだ誰も来ていなかった。
訓練後だからシャワーとか着替えとかするもんなー。

「あー…A―01って通称『ヴァルキリーズ』だっけ？」

「ん？そうだな。部隊全員が女性だからそういう名前になったって話だ」

何気に振った話題に武は思い出をかみ締めるように答える。
随分世話になったって言ってたから再会が感慨深いんだろうな。泣き出したりしねーか、こいつ？

「そりやまた華やかな部隊だ――」

「……え？」「……」

俺の言葉を遮って素っ頓狂な声が上がった。
声のしたほう、ブリーフィングルームのドアには目を丸くさせた女性6人。

しかも全員すげー美人ときたか。

彼女達がヴァルキリーズか。
あんな美人に囲まれていたとは…白銀武赦すまじ！！と、隣を見ればなぜか彼女達と一緒に驚いている。

お前が驚いてどーすんだよ。なんて突っ込みは置いといて、俺は改

めて入り口で固まったままの彼女たちに視線を移す。

「どうした、さっさと入らんか貴様等」

ドアの向こうから更に声。

入室してきたのは更に美女二人。

後で武を殴ろう。

きつと神様は赦してくれる。

「ん？誰だ？」

おそらく、部隊の隊長であろう女性が訝しげな目で俺と武を交互に見る。

武はまだ驚いたまま。

いい加減帰ってきてくれ。

「始めましてお嬢さん方、香月副司令の命令により本日付で横浜基地所属となる伍江宏輝大尉です」

「『『『『大尉！？』』』』」

あーいい感じで驚かれてるなー。

こっそりと武を肘で突付き、発言を促す。

ようやく意識が戻ってきたのか、武も敬礼を決めー

「同じく、本日付で横浜基地所属となる白銀武少佐です」

「『『『『少佐！！！？』』』』」

気持ちは分かる。

だって武はどう見たってコノ中じゃ一番若いんだから。

そんな奴の階級が少佐って何の冗談だwww

「すぐに副司令がいらっしゃると思うから、中に入って待ってたらどうだ？」

俺の言葉に7人は顔を見合わせ、黙ったままだが従ってくれた。

堅い話し方は性に合わんな、やっぱ。

まあ一応軍人さんだからな。外面はきっちり作っておかねば。

ヴァルキリーズの面々が俺達の真正面に整列する。

全部で8人か…一人はCPだから変則二個小隊しか組めねーじゃん。元々連隊って話じゃなかったか？損耗率激しいなんてれべるじゃねーぞ（汗

「全員揃ってるわねー」

軽い口調で副司令登場。

号令を掛けようとするが、無駄だからいいと一蹴されてしまいました。

「こいつら今日からあんたたちの教導官になるから、そのつもりでよろしく」

「ええ〜っ！！??」×8

紹介もなんのその（名前はさっき済ませたけどさ）副司令は説明を

ふっ飛ばしてそんな事を口走った。
隣の武は頭抱えてるし。

たしかにイキナリ過ぎだな、こりゃ。

「副司令、よければ簡単に紹介だけお願いします」

嫌そうな、面倒くさそうな表情で副司令は俺を見る。
ナニコレ？俺が悪いのか？

「こいつらは極秘部隊の二人でね、さっきあたしの任務から戻ってきたの。で、しばらく他の任務も無いからあんたたちの教導をしてもらっわ」

簡単だわ、確かに。

名前とか紹介しないって事は外で聞いてたんですか貴女…

「こっちの背の高いのが伍江大尉、抜けた顔が白銀少佐よ。覚えなさい」

「適当な紹介をありがとうございます。副司令」

どういたしまして。と手をひらひらされた。
駄目だ、皮肉で勝てる気まったくしない…

「教導とおっしゃいますが副司令。このお二人は—」

「強いわよ」

有無を言わせぬ声で隊長さんの言葉を遮る。

一部のーてか、青い髪のパニーテールが胡散臭そうにこっち見てるんだけど。

他のメンバーも、まあ似たような表情で俺たちを見ている。

「証拠は後で見せてあげるわ」

ヴォールク・データのシミュレートが。

アレなら確かに十分すぎる証拠になるだろうな。

是非とも見せて、この痛い視線から逃れたいです。

「で、伊隅。あんたたちの紹介は？」

「いえ、まだです」

「とろいわねー、ちゃっちゃとして頂戴」

貴女を待つてたんですー。とは誰も言えないわ。

引きつらせた笑顔を咳払いで消し、隊長さんが一步前に出る。

「伊隅みちる大尉であります。A―01部隊の隊長を務めております」

暗赤色―っていつのか、あの色は？―の短い短髪癖毛の美人さん。
やべー、すげー好みだ…

「速瀬水月中尉であります！！副隊長を務めています」

一番胡散臭そうにしていた青髪パニテ美人。
強い強そうだなー。

……頭頂部のアンテナみたいな髪は何だろう？

「涼宮遙中尉です。戦域管制を担当しています」

明るい髪色でセミロングのほんわか笑顔の美人。

コノ人は頭頂部に二本……ソレで戦域管制……なわけねーか。

「宗像美冴中尉であります」

伊隅大尉とよく似た髪色でショートカット。

中性的な雰囲気美人だなー。

ハスキーヴォイスが魅力的だ…

「風間栲子少尉です。よろしく願いしますね」

淡いグリーンのロングヘアー。

お嬢様って感じの美人だ。

なんとなくだが癒しのオーラが見えるぜ。

「藤堂沙希少尉であります。よろしく願いします」

黒髪ツインテール。

活発そうな美人だ、ただ落ち着きがなさそうだな。

「森崎奈央少尉です。よろしく願いします」

赤みがかかったロングヘアー。

控えめな雰囲気美人。

風間少尉ばりに髪なげーな。

「神楽梨佳少尉です。よろしくお願いします」

淡い紫色のショートボブ。

美人って言うより可愛らしい感じだ。

くりッとした眼がポイント高し。

「部隊全員美人って……ココは天国ですか？」

視線が一気に俺に集まる。

口に出しちゃったか。しかし言わずにはおれまい。

だって皆すっげー美人なんだもん！！

連呼してるけど他に表現シラネーよ！！

よし、後で武を二発殴ろう。大丈夫、神様はおれを赦してくれる。

「アホなことやってんじゃないわよ」

一際刺さる冷たい視線。

副司令は完全に呆れ顔。武も同じ顔してやがるし。くそう、三発に増やそう。

とりあえずメンバーの自己紹介に答礼で返し、簡単ではあったが自己紹介を終える。

さっきの発言が尾を引いてるのか、俺に対する視線は微妙なものであるが、我慢我慢。

「あの、副司令」

びしっと手を上げ発言を求める速瀬中尉。

伊隅大尉が叱りつけようとするが、副司令はあっさりと発言を許し

た。

「お二人の年齢っていくつなんですか？どう見ても少佐は私たちよりも若く見えるんですが？」

「あー……」

言いにくそうに武が苦笑を浮かべる。

黙ってたところでいずればれてしまう事だ。追求を受けるなら早いうちがいいか。

お互いに視線でやり取りをして、まずは武が。

「18だ」

「22だな」

続いたのはいいが、皆絶句してるよ。

仕方ないっちゃ仕方ないか。俺は多少なりと納得の表情で見られているようだが武はそうは行かない。常識で考えたら異常な出世スピードだ。

どれほどの戦果を、功績を挙げれば少佐なんて地位に、18という若さで駆け上がれるのか想像も付かないだろう。

俺も付かない。

だが、腕につけた階級章と香月副司令の言葉が嘘で無いと語っている。

「なんでそんな！？」

「速瀬」、ここから先は『Need to know』よ。分かる

わね？」

軍人としてソレを言われちゃ黙るしかないですよ。情報は知るべきときに必要なものだけ知らされる。知らされないのは知る必要が無いから。だっけか？

詳しく覚えてないが、切り捨てる必殺の呪文だという事は記憶の片隅にある。

簡単に納得出来ないだろうが、してもらうしか仕方がない。

だからそんなに睨むなよ。

「で、白銀。訓練はどうするわけ？」

「そうですね、申し訳ありませんが今日は解散にして頂いてよろしいですか？宏一伍江大尉と今後の打ち合わせもしたいので」

「少佐に賛成ですね」

とりあえず同意しとく。

今後どうするか話し合いをしておかないと色々と面倒そうだし。

「ふーん。追って連絡って形でいいのかしら？」

「はい。方針が決まれば副司令に報告します」

「そうして頂戴。こそこそ動かれるの嫌いだから」

だから何故俺を見るんですか貴女！？

「じゃあ、あたしは戻るわね」

ひらひらと手を振って退室する副司令。

敬礼!!と掛けられた号令には心底嫌そうだった。

「集まってもらったのに悪かったな、伊隅大尉」

上官っぽく喋ってはいるが、武は何処か不自然に見える。

思い当たるのは、彼女達が元・上官だからだろうな。俺からすれば元々武は上官だったので特に気にはならない。

今まで上司だった人間がいきなり部下になるんだから戸惑うのも無理はねえか。

「いえ。白銀少佐と伍江大尉の教導を楽しみにしています」

「期待に添えるよう努力する」

浮かべられた不敵な笑顔を受け流して、武は俺に「行くぞ。」と視線で合図した。

もう少し美人に囲まれていたかったが、ソコは上官命令。おとなしく付いていくべし。

「敬礼!!」

片手を挙げてそれに答え、俺たちは廊下へと出る。

「なあ」

少し進んだあたりで、ちょっとした疑問があったので尋ねることにしよう。

「何でさっき驚いてたんだ？」

「オレの知らない先任が三人いた」

ふむ。

思い返してみても、おそらくその二人であろう名前が浮かぶ。

「藤堂と森崎…神楽か？」

「ああ。」

紹介があつた時に、コイツの表情が一瞬変わったからな。
気づいた俺すげー！！

「BETAが新潟に侵攻してきた時に離れた三人。だと思う。」

「今回は間に合つてよかったな。守つてやろうぜ、仲間達を」

武は苦笑しながら俺を見ていた。

大体難しく考えすぎなんだよ。

変なところで真面目だからな、コイツ。

「で、今度は何処に向かつてるんだ？」

もう一つの疑問。

さっきからずんずん進むのはいいが目的地がハッキリしていないのだ。

PXで飯つてわけでも無さそうだし、自室で理論を仕上げる訳でも無いらしい。

と、視線の先にドアが見えた。

その先にはグラウンドと演習場しかないはずだが。

「会いに来たんだよ」

一足先に外へ出て、武はソレを感慨深げに見渡す。

遅れてそこへ出てみれば、怒声を上げる教官と訓練兵達の姿が。

横に立ち、俺は武の表情を伺う。

強い決意と、親愛の情を浮かべた瞳で『彼女達』を見据えて、武は言う。

「久しぶり、207分隊」

二人の衛士と戦乙女（後書き）

次回『“誓い”を新たに』

愛した彼女達との再会。
英雄は何を想う。

『誓い』を新たに（前書き）

大切な恩師、仲間。

英雄の胸に去来するものは。

『誓い』を新たに

<白銀 武>

教官であるまりもちゃんの怒声を浴びながら、ランニングをする10人の訓練生を見て、オレは思わず目頭が熱くなってしまった。

『あの時』失ってしまった仲間たちがいる。その事に、情けない話だが涙が出そうになったんだ。

宏輝がオレの後ろにいて助かった。

こんな顔はあいつにだって見せられない。

あいつの前では悪友だったり隊長だったりといろんな顔を見せたが、泣き顔だけは流石に見せたことは無かった。

勘がいいからバレてるかもしれないけど。

服の袖で零れそうな涙を拭い、オレはまりもちゃんに近づいていく。その少し後ろを宏輝が歩く。普段はおチャラけた男だけど、求められている時に相応しい態度が取れる事には舌を巻く。

“前の世界”では指揮官の経験もあるが、オレだってそんな堅苦しい事は苦手なんだ。

「ん？貴方達は？」

気配に気が付いたのか、まりもちゃんは怪訝な表情でオレ達を見た。夕呼先生から連絡はあったと思うが、流石にこんな若い人間が来るとは思ってなかったんだろう。

少しだけ距離をとって立ち止まり、昔散々叩き込まれた敬礼で持つて挨拶をする。

「初めまして、神宮寺軍曹。本日付で香月副指令の直属部隊に復帰した白銀武少佐だ」

「同じく、伍江宏輝大尉だ」

A0-1の皆と同じように驚くまりもちゃん。
オレだって階級もらったときは驚いたんだ、そりゃ当然か。

「自分は207分隊の教導を勤めております、神宮寺まりもであります！！」

完璧な答礼で持って自己紹介。
直に驚きから帰ってくるあたり、流石だなー。なんて感心してしまう。

それと…何故だか後ろから殺気を感じてしまうのだが、きっと気のせいだろう。
覚えが無いんだし。

「訓練中にすまないな軍曹。早いうちに挨拶だけでも、と思ってね」
「副指令よりお話は聞いております。少佐と大尉自らの教導は彼女達の力となりましょう」

「オレ達はいくまでも軍曹の補佐だ。“問題児”もいる事だしな」
「はっ！！」

オレの問題児って発言に思うところはあったのか、少し苦い顔をしてみよう。

いくらまりもちちゃんが優秀な教導官とはいえ、207分隊に属するB分隊の連中の生い立ちは厄介だろう。

下手な事をすれば首が、物理的に跳ぶ事だってありえるような、例えは悪いが爆弾みたいな連中だ。

自惚れちゃいないが、何とか出来るのはオレしかない。

「集合！！」

号令を受けて、分隊の皆がこちらに走ってくる。

目の前で一列に整列し――もう慣れたが――やっぱり怪訝な表情でオレ達を見ている。

「お前達に紹介する、こちらのお二人は本日付で着任された白銀少佐と伍江大尉だ」

「白銀武だ。軍曹と大尉と貴様らの訓練指導に当たることになる。よろしく頼む」

「伍江宏輝だ。俺は二人の補佐でしかないが全力で指導してやろう。よろしくな」

「よろしくお願いします！！」×10

「本来なら貴様らの様な訓練兵が、教導を受けれるような方々では無い。しかし少佐の発案プロジェクトに名誉な事に貴様ら訓令兵が

選ばれた。そのお二人の期待に答えられるよう精進しろ!!」

「はい!!」×10

びしっとした返事はいいんだけど…

プロジェクトなんて嘘ついてオレ達を説明したのか、夕呼先生!!
でも考えれば、そうでもないと何で佐官が訓練兵の指導を?って話になっちゃうからな…
乗ってくしかないんだ。

「では、自己しょー」

「ああ、かまわん軍曹。既に資料で確認済みだ」

そう言うつまりもちゃんは「失礼しました!!」と敬礼。

「そういわずに少佐。俺は“マダ”資料を読んでいませんので」

「あ!?!」

そうだ、すっかり忘れてた!!

オレは面識が(一方的だけだな)あるからいいけど、宏輝は初対面になるのか。

すっかり失念してた。

しかし分隊の皆が並んだあたりから殺気が凶悪になってるんだけど…
ココまで来れば流石に気のせいじゃないよなー。
後で本人に聞いてみよう。ちょっと怖いけど。

「すまない軍曹。自己紹介をしてもらっていいか？」

オレの言葉にまりもちゃんは頷いて、簡単な自己紹介をもらうことになった。

< 伍江 宏輝 >

唐突な話で申し訳ないが、俺は女性に免疫が無い訳ではない。顔は悪くないと自負してるからそれなりにモテるし、経験だってある。

だというのに、俺の心臓は痛いくらいに早鐘を鳴らしてやがった。

だって仕方ないじゃん!!

10人の美少女!!

上半身はノーブラでタンクトップ!!

そんな子達が今日の前にいるんだぜ？

何人が髪型がトランスフォーメーションな奴がいるが、正直関係ない。

教官も美人で、横浜基地には美人・美少女じゃないと入れない暗黙のルールでもあるんじゃないかと、本気で疑っちまいそうだ。

こんな美少女と、きゃっきゃうふふ、くんずぼぐれつ毎日楽しく（訓練）やってた武に殺意が沸く俺を誰が責められる？ いや、責められる筈がねー！！

と、言うわけで只今殺意の波動を白銀少佐にプレゼント中さ

「では、順番に自己紹介をしろ」

「涼宮茜訓練兵であります。207A分隊長を務めていますー！」

俺の思考を遮って、神宮寺軍曹の声が飛んだ。

向かって右側かららしく、美少女が敬礼と共に一步前が出る。

オレンジ色のショートカット。（カチューシャ付）

大きな、意志の強い瞳が印象的だな。

で…この子もアンテナが立ってるのか…

彼女は突撃前衛かCPに向いてると俺は見るね。

一本だから突撃前衛だろうな…

ん？涼宮…？

「柏木晴子訓令兵であります。A分隊の副隊長を務めていますー！」

っと、次の美少女だ」

青い髪のショートカット。

飄々としてそんな雰囲気。嫌いじゃないな！。

性格も明るそうだし、仲間内の相談役にはもってこいって感じた。

「築地多恵訓令兵でありますしゅ！！」

噛んだよコノ子…アラヤダ可愛い…

淡い紫色のサイドポニー。

一目で分かる。

コイツ絶対落ち着きがねえな。

後、ロリ巨乳とかスベック高過ぎなんですが…

「高原美奈子訓令兵であります！！」

少し暗い緑色のポニーテール。

顔の両サイドに少しだけ髪を落としていて、中々他のポニーテとは一風変わった魅力をかもし出している。

高原…恐ろしい子！！

でも可愛いから許す！！

「朝倉みなみ訓練兵であります！！」

うん。良識ある俺は突込みとかしないんだぜ？

親がファンだったってことにしておこう。

コノ世界に漫画があるかは置いといて。

嫌味のない程度に明るい金髪ショート。

ちょっとツリ目が可愛いな…

緊張してるのか少しキョドってるーだが、それがいい！！

「榊千鶴訓練兵であります。207B分隊の隊長を務めております
!!!」

ちと野暮つたい感じのする三つ編みと凛々しい眉毛が印象的過ぎる…
あとデカイ眼鏡…

素材は悪くない、磨けばピッカピカに光るタイプだ。

「御剣冥夜訓練兵であります。B分隊の副隊長を務めております！
」

さて、コノ10人の中でも彼女は特別美少女なんだが…

あの髪型何処から突っ込んだもんかね？

ポニテは素敵だ、ソコは断言する。しかし猫耳のような頭頂部とか
つくんしてる側頭部の髪は表現しづらい。

隙を見てわしゃわしゃしてみよう。

なんか御剣からじつと見られてるんだが？

あれか、一目惚れとかかな？

望むとこ

「彩峰慧訓練兵です。」

次の美少女が出てきました。

ぱっと見て、感想。

人の目あるんで心の中で失礼します。

巨乳キター!!!!!!!!!!!!

失礼しました。俺自重www

ちとポーカーフェイスな感じはするがやる気は伝わってくる。
眼にやけに力がある感じがするな。

黒いショートカットは、活発なイメージもある彼女にはよく似合う。

「珠瀬王姫訓令兵であります!!」

ピンク色の…ピンク色の…

なんて表現したらいいんだ？あの髪は!!

御剣みたいな猫耳っぽい髪と、後方に複雑に捻じ曲げられて、鋭角
としか言いようのない角度で立っている髪。

物理法則完全無視か…どんな不思議現象であるの髪型が形成されてい
るか俺にはワカンネー。

一番小柄で、保護欲沸いちゃう…

「鎧衣美琴訓令兵です!!」

改めて見て思うが、コノ子は判断に困る。

えーとどっちだ？男の子か女の子か。

胸…はない。余計判断に困るぞ、おい。

青いショートカットが魅力的ではあるんだけど。

コノ子頭頂部に触覚があるよ!?アンテナでは断じて無い。ソコは
譲らない。

武に聞くのが早いな。

「以上が207分隊10名であります!!これからご指導よろしく
お願いします!!」

「よろしく願います!!」×10

神宮寺軍曹の挨拶と共に、元気よく続く訓練兵10人。

期待に満ちた眼差しで見られてると思うと、俺のやる気もうなぎ上りさ。

こんな美少女達を、花咲く前に戦場で散らせるとか断固拒否!!

実際の教導は日をあけてからだけど、期待に精一杯答えてやろうと俺は思うわけだ。

「皆に聞いておきたいことがあるんだけど、いいか？」

「!？」

イキナリ口を開いた武の言葉は、上官とは思えないほど気さくで、優しさに満ちたものだった。

俺は「いや、俺も含むココにいる全員が驚き、武に視線を集める。

こんな声を聞いたのは、俺は初めてだ。友人として、副官としてコイツと5年以上付き合ってきたが聞いたことは無い。

一緒に戦場を駆け回っていたときの言葉が、不意に思い出された。

『特別な仲間だったんだ』

武が訓練兵時代に一緒に時間を過ごした仲間を語るときの言葉だ。

俺はソレが羨ましかった。武を、人間としても友人としても部下としても尊敬していたし、誤解を承知で言えば好きだった。

だからそんな事を言ってもらえる、今は無き戦友たちに俺は嫉妬すら覚えたことがある。いつか俺もそう言って誇らしく語ってもらいたい。偽りの無い『伍江宏輝』の願いだった。

ソレほど特別なのだ、彼女達は。

世界を救うのと同じくらい、もしかしたらそれ以上に彼女達を『死』から救うのが、武の願いなのだ俺は理解した。

「お前達に“守りたいモノ”はあるか？」

その質問に正解なんて無い。

守りたい存在なんて人それぞれだ。

俺はなんだろうな？

自分の命は大事だ。これは絶対。

仲間の命も大事だ。これも絶対。

『世界』は正直その後。『国』も後回し。そもそもこの世界では思想が違いすぎて正直付いて行けん。

訓練兵たちは答えない。

正解は無いとしても、この問いの意味がいまいち掴めてないらしい。

武は苦笑しつつ、皆を順に見つめる。

「生き残るため、誰かを守るため、国のため、世界のため」

その口調は何処までも優しく、とても暖かい。

「何が一番大事かなんて正解は無い」

世界を救うと豪語すれば『英雄』か？

家族を守りたいというのは自身のエゴか？

生き残りたいのはわがままか？

俺はそんな事はねーと思ってる。

武もきつとそうなんじゃないだろうか。

誰もが自分の大切なものの為に命を懸けて戦ってるんだ。

同じように何かを守りたいと思ってる奴等も戦ってるんだ。

「オレ達は一人じゃ弱い。一人人でBETAを倒すなんて絶対に無理だ」

だから俺達は集ったんだろう。

守りたいものを守るため、手を取り合って困難に立ち向かうために。

「ここにいる皆は、掛け替えの無い絆で結ばれた仲間たちだとオレは信じてる」

ぴくん。とその言葉にB分隊の連中が反応した。

今の言葉に思うところがあるのだろうか。少し居心地が悪くなったようにも見える。

「仲間を信頼し、BETAに立ち向かう事が出来る衛士になると信じている」

神宮寺軍曹は目を閉じ、言葉を深くかみ締めていた。

最初は戸惑いがちだった訓練兵たちは、今は真剣な表情で武の言葉を聞いている。

「皆の訓練に尽力を尽くす教官を信じる！！共に汗を流した仲間を信じる！！厳しい訓練に耐える自分を信じる！！」

まるで『誰か』に言い聞かせるように、武の言葉は響いていた。

ソレを受け止めた『彼女達』は、その瞳に新たな決意と誓いを抱く。

「オレから言える事はこんな事ぐらいだ」

ちよつと熱くなり過ぎたと自覚はあるのか、照れたように頭をかく。

「オレと宏輝の期待を裏切るなよ？」

「は、はい！！」×10

意地悪く言う武に戸惑いつつも返事を返す10人。
それじゃ。と片手を挙げて武が戻ろうとする。

俺は空気だったが、まあいい。

おとなしく後ろを付いてくさー。

慌てて神宮時軍曹がかけた敬礼には、武を倣って片手を挙げて返しておきました。

廊下に戻ったあたりで、白銀武は深いため息を吐いた。

先ほどの言葉の端々で、B分隊の5人が僅かに動揺していたのを見逃さなかったためだ。

だが、と思う。きっと踏み出す一歩にはなるだろう。

根は深い。焦っても拗らせては元も子もない。

彼女達は、周囲の人間が自分たちの生い立ちを酷く気にしていると思っているが、武に言わせて見れば真逆だ。

彼女達が、自身の生い立ちを気にしすぎている。

ソレは確かに根底かもしれないが、形成する全ての要素では、決して無いことを分かってほしい。

『自分』は『自分』だ。

特殊な環境が、そう理解させる為の弊害となっている。

「随分と気を揉んでるな」

後方から掛けられる言葉に、武は苦い笑顔しか浮かばない。

「結構深い問題なんだよ」

「複雑な家庭環境もBETAの前じゃ意味無いんだがね」

宏輝の言葉は正論である。

だが、その一言で片付くほど簡単ならば、『相互不干渉』なんて暗

黙のルールは出来上がらないのだ。

「訓練兵にばかり気を取られてるわけにもいかんだろ、とりあえず今後の打ち合わせかねてPX行こうぜ」

成すべき事は多い。

日付が早まっていることから考えても、“前”の記憶はほとんど当てにはならないだろう。

A-01の教導、理論の確認と00ユニットの問題点、そして今後の戦いで必ず必要となるであろうモノ。

出来うる限りに最善を尽くし、起こりうる事象の全てに対応出来なければ彼等にとっての勝利は、再び闇に飲まれる。

それだけは避けねばならない。

PXに向かう二人は無言だが、その胸の内は、強く・揺るぎ無い決意が溢れていた。

「それはそうと」

ふと思い出したように、宏輝は口を開く。

武が今日中に00ユニットの理論をまとめるなら、それと平行して出しておかなければならない企画案があった。

「アレが無いと今後は苦勞するだろうから、一緒に持っていくんだよな？」

「勿論」

そっちは宏輝が担当することとなるが、今後を考えれば安い苦勞で

ある。

「今回は早々に仕上げるぜ！！“XM3”！！」

ソレはただの処理装置。

だが、彼等にとっては『矛』を研ぎ澄ます絶対の存在。

戦乙女の新たなる剣。

人類が攻勢に転じる第一歩。

二人の衛士は誓いを新たに。

僅かな希望を手繰り寄せるため、ただただ邁進する。

『誓い』を新たに（後書き）

次回『生み出される“存在”』

彼等が欲するものは、研ぎ澄まされた剣。

生み出される『存在』（前書き）

二つの理論は、やがて強大な力となる。

生み出される『存在』

<白銀 武>

「白銀くあんた最高よ!!キスしてあげるわ!!」

「どわーやめてください先生!!」

「ギギギ…タケル…クロス…」

オレに抱き付きキスの雨を降らせる夕呼先生と、じつとり殺意の視線を送る宏輝。

足元には昨日殆ど寝ないで仕上げた書類が散らばってしまっている。

ああ、なんてカオスなこの空間。

何でこんな事になってるかといえば、話は少し前に遡るわけで…

先生の執務室に向かう前に食事を済ませたオレ達は、B19フロア

迄降りるエレベーターを待ちながら今後の確認をしていた。

まず理論を確認してもらい、オレ達の信用を少しでも底上げしておく事。

次に、おそらくテンションが上がるであろう先生に、その場の勢いで新OSであるXM3を完成させて貰う約束を取り付ける事。

A・01部隊へ戦術機の教導を行うのは、XM3が完成してオレと宏輝が概念機動のデータ集積やバグ取りを終えてからだ。

207分隊に関しては、訓練にちよくちよく顔を出し、気が付いた事があれば意見なりアドバイスなりしてやろうという話になった。

彩峰や冥夜、速瀬中尉に散々鍛えられたおかげもあって、オレの近接戦闘能力は生身でも戦術機でもかなり強い部類に入る。剣撃・格闘となんでもござれ。

勿論射撃も自身はある。

あるんだけど、ソレに関しては宏輝の方が、まあ悔しいが腕は上だ。支援・掃射・殲滅・狙撃etc…バリエーション豊富なあいつに後方担当のメンバーを任せておけば、完璧な布陣になるんじゃないかと思う。

下手するとA・01の皆に比類しちゃうかもなー。

それ以外では、暇があればお互いにシミュレーターなんかで模擬戦をしようかって相談していた。

せっかくだから飯のおかず賭けるのも悪くないよな。

やっと来たエレベーターに乗り、一直線に執務室を目指す。

「んむーーーー!?」

「!?!?!」

叫びながら先生は俺にキスして来た。

あー…女の人の唇って柔らかで、なんか全身からイイ匂いがーって
!!

そうじゃない!!

うわー忘れてたよ、この人興奮するとキスする癖があるんだ…

抵抗するにはちょっと惜しい気がして、キスされるがままになって
るオレ。

回想終わり…

で、冒頭のシュチュエーションなわけでした。

「あたしが言いたかったのはこれなのよ。もうさいつこう!!あたしの天才!!」

自画自賛しながらくるくる回る先生を尻目に見つつ、横から差し出されたハンカチを受け取って顔を拭く。

キスマークだらけの顔で外を歩くほど度胸は据わっちゃいない。

「さんきゅ」

「いやいや、上官殿」

オレが返したハンカチを受け取った宏輝の反応がオカシイ。
笑顔なんだけどさあ…怖いんだよ。

「テメエ後で体育館裏来いや…」

「なんでそうなる!!」

誰がどう見たってアレは不慮の事故だろう？

押し当てられた胸が気持ちいいとか、先生の体が柔らかくてドキッ
とするとかんな事思ってないぞ!!

「月夜の晩に気をつけな」

それだけ言っで、さっきまでの様に直立姿勢で“待機モード”に入
りやがった。

視線はもう遠くを見ている。

と、多少は落ち着いてきたのか先生は自分が放り捨てた書類をせっ
せと拾い始めていた。

「なにしてんの、あんたたちも手伝いなさいよ（怒）」

えー…

只今お片づけ中。

「これで人類は後30年は戦えるわね。白銀、あんたはこの世界の『救世主』だわ」

憑き物が落ちたかのような優しい笑顔で、先生はそんな事を言ってきた。

『救世主』。ソレは間違いなく貴女です。香月夕呼先生。

現実を見ずに、喚いて泣いて誰かに当り散らす事でしか自分を保つ事が出来なかったオレとは違い、貴女は地獄に一人で立っていた。非難も中傷も、嘲りも全て受け止めて一人で戦っていた。

さぞかしオレは餓鬼に見えたでしょう。

今やっと貴女を、本当の意味で支えられるような気がしますよ。

でもオレは口には出さない。

先生はそんな事望んではない。

オレと宏輝がやるべき事は、賞賛を送る事ではなく、この人の『仲間』としてBETAを駆逐する事だ。

「絶対にBETAを倒しましょう」

「当然よ。そのために今までやってきたんだもの」

笑いあうオレ達。

よし、言い出すなら今だな。

「先生、一つお願いがあるんですけど？」

「何？機嫌がいいから多少の無茶は聞いてあげるわよ？」

おお、狙い通りの展開だ。

残りの書類を渡し、今からその説明に入らせてもらおう。

「作ってもらいたいものがあるんです」

「ナニコレ？新型のOS？」

「はい。その名もV i s t——」

「マテコラ」

不穏な事を口走ろうとした宏輝を止める。

何故だか分からないけど言わせては駄目な気がした。

「XM3って名前にしようと思ってるんですが…まあ既存のOSじやあオレ達の機動が100%再現できないので、先生に新型を作って欲しいんです」

「は？」

始めて見るであろう先生の呆けた顔に、嘔き出すのを耐えるのが辛い。

ヴォールク・データでアレだけの戦果を叩き出したにも関わらず、

アレがオレ達の実力の全てでは無いって言われ方すれば当然かな。だけど、本当の話だ。オレ達の機動を最大限に引き出す要素が、現行の戦術機に使われてるOSには無い。

行動を前もって入力しておく『先行入力』

ある一定の行動入力シーケンスを『キャンセル』させる事が出来る概念。

決められたフレーム内での一定操作時に連続技の要領で攻撃を可能とさせる『コンボ』

この三つこそが新OSの真骨頂であり、真にオレ達が求めているものでもあるんだ。

「要は操作の簡略化と機動制御をパターン化する事。使用頻度の高い機動を――出来れば完全自動化させてソレを任意で解除可能にしろって事です」

実に簡潔に宏輝が概要を説明する。

分かりやすいとは思うんだが、先生はにやりと笑い――

「行動パターンをあんた達が組み上げて、切り出した後にトレースする事は簡単よ？けれど戦術機の任務は多種多彩、何処でどんな任務に付くかも分からないのに決まりきった動きしか出来ない、柔軟性に欠ける機体の実線で役に立つ？言っておくけど戦術機に求められているのは全天候全環境展開制圧能力。戦場の状況も敵の展開も毎回違う…タイミングの取り方はどうするのかしら？それともありとあらゆる状況に対応するパターンをあんた達が見せてくれるにかしら？あら、でもそれじゃあ技の数が多すぎて操作の簡略化は出来ないわね、本末転倒だわ」

一気に来た。

問題点が多すぎだろ…言われてみれば。

よく“前の世界”の先生はオレの簡単な説明で作ってくれる気になったよなあ。

「ある程度の汎用性を持たせるってのはどうですか？」

「あらゆる判断をコンピューターに任せるつもり？一刻一刻と変化する戦場で全てを最適に判断できる程万能じゃないわよ？戦術機は操作が自動制御ではなく間接的な統計思考制御って形で人間の判断に委ねられてるのはそういう理由があるから。」

早い話が、いくら多彩な動作パターンを用意して見せても的確な状況判断が出来ないコンピューターには使いこなせないわ」

反論できる？って言いたげな表情だな…

言葉に詰まるオレを尻目に、宏輝がお返しとばかりににやりと笑った。

「まあコンピューターの並列処理速度の問題点に関しては、副指令の研究のお力をお借りしたいと思ひまして、ね」

「っ―あんだ…」

「因みに、“前の世界”ではこのOSが普及する事によって戦死率が通常の3割以下になった。というデータもあります」

「……」

「お手ごろでいいと思いますけどねえ。OS換装するだけで第一世代機が第三世代機を圧倒できるんですから」

先生の顔がどんどん険しくなっていくてよ…
怒らせてどうするんだ、この馬鹿。

多分完成させることが出来るだけに、思惑に乗りたくないって所か？

「——いいわ、作ってあげる」

苦い表情のまま、先生は吐き捨てるように、そう言うてくれた。

多分、オレの理論に対しての礼みたいなもんだとは思っけど。
これは―宏輝は後で地獄を見るかもな…

「「ありがとうございます！！」「」

「ふん…要点はまとめてあるみたいだからすぐに取り掛からせるわ。
出来上がったらあんたたちには寝る間も惜しんでデータ取ってもら
うわよ。覚悟して頂戴」

「「了解！！」「」

「ああ、白銀」

深々と下げた頭を上げれば、ほんの僅かに申し訳無さそうな先生の
顔。

「理論は完璧よ。でも、00ユニットの起動にはまだ時期が早いわ
…分かるわね？」

「はい。よろしく願います」

「じゃあ行きなさい。新しいOSは急ぎで仕上げてあげる」

もう一度オレ達は頭を下げ、忙しそうに机に向かう先生を置いて、執務室を後にした。

*

「よくもまあ先生相手にやるな、お前も」

下手に機嫌損ねたら、ハイヴに単機で突入とかさせられそうだけだな。

流石に怖くて俺には出来ない…

「ふふふ、こうやって悪い印象から始まって後々好感度を上げるイベントにつなげるんだよ」

いやいや、間違いなくお前の好感度は現状最悪だろう。

むしろ上がる要素がまったく見当たらないけど…

ってかそもそも先生を攻略対象に選ばうとするあたり、コイツも中々度胸がある。

教えないけど、あの人年下は性別認識圏外だし。

「あのひとデレたら可愛いと思うんだが… まあその話は置いておい
てだ、今からシミュレーターで一戦やるか？」

馬鹿の戯言はほつといて、ある一角で俺は足を止めた。
その先にあるのは薄暗い廊下とドア。

オレを求め、オレが求める人が眠る牢獄。

「忘れ物か？」

あの時と同じ言葉。

「ああ。大事な忘れ物だ」

ソレに違う言葉で答える。

「そうか。じゃあ俺は伊隅達の訓練でもみてくるわ」

互いに答えなど待たずに足を進める。

ほんと、あいつは馬鹿の癖に気が回る…

目の前の重厚なスライドドアが開いたその先に、会いたかった“彼
女達”がいた。

部屋の真ん中で青白く光るシリンドーに収められた脳髓。
その傍らに立つ、一人の少女。

ゆっくりとこちらを向き、そして眼を見開く。

「初めまして」

近づく。

ススツと逃げる少女。

もう一步近づく。

ススツと逃げる少女。

「オレの事… “知ってる” か？」

その問いに、驚き、頭に付けられているウサ耳をピヨコン。と跳ねさせる。

「白銀… タケ… ルさん…」

「おう、白銀武だ。名前聞いていいか？」

「社… 霞… です」

「よろしく。霞ってよんでいいか？」

少しの間が空き、でも霞はゆっくりと頷いてくれた。

思わず嬉しくなって頭を撫で撫でしてしまう。

戸惑いながらもほんのり頬を染め、霞はしばらくされるがままになっている。

「白銀さんは…」

「ん？」

「白銀さんは、私のことを “知って” いるんですね？」

「ああ。霞はオレが世界をループしているのはリーディングで知ってるよな？」

少し悲しそうな顔をして、はい。と小さく頷く。

「二人で遊んだりしてさ、色んな思い出を作ったんだ……だからさ、今度も一緒に思い出つくろうな」

差し出した手を恐る恐るだけ握ってくれた。

数回上下させて、俺が笑うと嬉しそうにしてくれた。

今度こそ、この子も守りたい。

笑って思い出が作れる世界を取り戻したい。

だから――

「――純夏、久しぶり」

だから、どんなに辛くてもお前の力を使わなきゃならない。

霞から手を離して、シリンドーに近づいた。

始めて見たときは嫌悪すら覚えたけど、今となってみれば苦い思い出だ。

シリンドーに額を当てて眼を閉じる。

オレには霞のような力はない。

だけど、こうする事で少しでも純夏を近くに感じられるような気が

した。

「純夏…またチャンスをもたらったよ。今度こそ…今度こそ守ってみせるからな」

純夏が失われる度に何も出来なかった自分。
何度もした約束はその都度破られた。

辛い。

彼女を失うのは辛い。

「仲間と一緒に来たんだ…馬鹿だけど…結構頼りになる奴でさ…」

一人ではきつと押しつぶされていた。

オレは強くない。

何度も仲間を失うのには耐えられない。

でも、今回はあいつがいる。

詳しい理由は俺にはわからない。

でも共にループを経験し、『同じ目的』に向かう仲間がいるんだ。

「そいつと一緒に…オレ、頑張るから」

全部終わったらみんなでお笑おう。

眼を開けると、霞がオレの服の裾を掴んでいた。

「いっぱい…辛い思いしたんですね…」

「ん…でも頑張れるよ。みんながいるから」

「…白銀さん。」

オレの思考を読んでしまったらしく、眼に涙を浮かべて見上げている。

それでも俺に、どうしても伝えなければならぬと涙を拭い、シリンダーを見た。

「ほんの少しですけど…純夏さんから暖かい光が見えました」

「本当か？」

「はい。喜んでいます」

ああ…その言葉で、オレはまだまだ戦える。

—純夏。

お前の力が求められる時は、きっと大規模な作戦の前なんだろう。

でも、必ずオレが支えてみせる。

二度とお前を傷付けさせやしない。

オレはお前が『好き』だから。

この世界でも、守り抜くと誓うんだ。

「これからよろしくな。霞」

「はい」

もう一度だけ握手をして、霞に純夏との思い出話をしてやろうと俺は思っていた。

< 伍江 宏輝 >

ってなわけで、一人寂しくシミュレータールームに来たはいいが……
おい！！俺の伊隅ー！！何処だー！！

「誰もいやしねえ……」

訓練で使う時間帯じゃねーのか？

自主訓練ぐらい誰かやっててもよさそうだが、基地の空気が緩いのと関係してるんだなコリヤ。

どうする、俺？既に飯は食ったからPXに行ってもやることないし

な！。

まあとりあえず煙草でも吸うか。

因みに俺は愛煙家。

PXに煙草が売ってあってよかった…どうせ合成モンだろうけど。

「あーよく考えたら俺の機体とかもねえジャン。暫くはシミュ戦だけかー」

部屋の隅っこに設置してある灰皿を使い、まあ一服。

自分が吐き出す紫煙をぼんやりと眺め、専用機について少し考える事にする。

副司令のことだから、第三世代機の不知火は用意してくれるだろう。個人的には撃震を推したいところだが、武の機動に付いていけなかったら話にならないので涙を吞んでおくか。

でも帝國製の第三世代戦術機には拡張できる遊びが無いのが気に食わない。元々は無茶を承知で仕上げたような機体のようで、設計が突き詰め過ぎてる。

量産型なんて遊びがあつてナンボだと思っただが…ワンオフの機体でもあるまいし、撃震を見習え！！

まあ完全に個人的意見で一方的見解だから味方が少ないんだよな！。折をみて副司令に提出してみるかな！。

名づけて『帝國戦術機魔改造計画！！』

不知火や吹雪なんかは発展性のための構造的な余裕が無いのであれば、無理に機体自体に手を加える必要はないんじゃないかなーか。

要は外付けにしまえばいいのだ。

大型の噴射跳躍システムとか追加型のスラスタもほしいよな。機体の出力上げるにはジェネレーターの大型化が必須か…これは致し方ない。が、燃費が悪くなりがちだな…突き詰めれば何とかなるか？出力上がりました、でもおかげで燃費も悪くなりました。じゃ話にならん。

ジェネレーター関連は後回しで考えるよう、今は機体自体をいじらないで済む改造だ。

推進剤も余計に持てるようにしなけりゃ三次元機動の本領発揮ともいえんだろうな！。

跳ぶ。が前提だし。

背中に跳躍システム系統付けるとなると問題は兵装だ…

可動兵装担架システムを丸々無くしてしまう訳だから、火力の低下は否めない。ならどうする？ウェポンラックを別途で用意してスラスタとかに付けるか？

長刀なんか腰に差してたらカッコイイと思うが…採用されて無いあたり使い辛かったんだろう…絶対カッコイイよな？

いや、ソレすらも外付けで『兵器換装システム』とか考えてみるか…ストライ。みたいに三種類とか作って――

「おや？伍江大尉？」

「ん？」

声のした方を見れば、そこには強化装備に包まれた宗像と風間の姿。敬礼に答礼で返し、二人は俺の近くに立つ。

「今から訓練か？」

「はい。今までミーティングをしております。大尉は？」

「見ての通り暇人でね、一服中だ」

殆ど吸わずに灰になってしまったモノは捨てて、もう一本に火をつける。

「我々の教導に来たのではないのですね？」

「残念だが。貴様等の教導はX M 3――まあ新しいOSが出来てからじっくりやる事に決まったからな。後二日は先だよ」

ほう。と宗像の眼が妖しく光る。

新しいOSという言葉に、案外興味をそそられたようだ。見れば風間もぜひ聞きたい。といった顔をしている。

「どうせ貴様等の機体は率先して換装されるんだ、全員集まってから説明してやる」

「はっ！！」

んで、ヴァルキリーズ全員集合したのはいい。したのはいいさ！

失念していた、俺の馬鹿！！

宗像と風間の二人だけならソウでもなかった。

しかし、美女が8人…それも強化装備という名のエロスーツで並んでるのを見たら流石に俺でもおっ勃つわ！！

涼宮遙だけはCPという立場上から国連軍の制服のままだが、だからこそ余計にエロ装備のメンバーが引き立ってしまっただよ。

落ち着けー落ち着けー俺……

ここで下手な行動取ってみろ、彼女達は副指令の直属部隊だぞ？直に報告が上がって…俺はきつと罰として解剖されてしまっ！！

脳と脳髓だけにされてシリンドーで実験されるんだ！！こえー、副司令こえー。

きつとウサギっ娘あたりがリーディングで、脳にだけになった俺の思考を読むんだろう。

『何か分かった？』

『すごく……えっちい……です……』

ぎゃー！！！！！！

脳になってまでナニ考えてるんだ俺の馬鹿！！

「では伍江大尉。今後導入されるであろう新OSについて、簡単に説明してもらってかまわないか？」

伊隅の声で正気に戻った俺は咳払いを一つして頷く。

いかな、興奮しすぎてトリップしてた…

んで、気を取り直して新OS『XM3』の簡単な説明。

コンボ・キャンセル・先行入力といった重要なシステムと、操縦に遊びが無くなるであろう事。

加えて、追従性も既存の物から大幅な上昇を果たすであろう事。後は正直出来上がってからの楽しみだ。

「ふむ、話に聞くだけでも有効なOSであると期待が出来るな」

「理論上は撃震でも旧OSの不知火に勝てると出ている」

「嘘!？」

「まあそれが普通の反応だな速瀬。とりあえずは机上の空論だろうが、信憑性は高いぞ？まあ実物はバグ取りと機動パターンの積み重ねが終わった後にお披露目となるからな。楽しみにしておけ」

「了解!!」×8

「ああソレと、一つ頼みがある」

思い出したように言う俺に7人は？ってなってる。

ふう。と、一旦息を吐き。

「真面目な喋り方は性に合わないんだ、もちつと楽にしてくれよ」

「まさか大尉、副司令と同じ事を…」

「冴えてるな、宗像」

笑顔を浮かべる俺。

確かに任務中、訓練中などは上官の顔をさせてもらうが、私的な時間には別だ。

出来れば気軽に話しかけて欲しいし、お近づきになりたい。

そうするためにも上司と部下の垣根は、公私の『私』の部分では出来うる限り取っ払ってしまいたいからな。

「実際お前等とはそう年が離れてるわけでもねーだろ？」

唯一、伊隅が年上だったような気がするが、まあソコは勘弁願いたい。

「お前も随分と変わった奴だな…」

呆れた様に伊隅が言うが、まあ性分なんで仕方が無いと笑う。

「なに、美人の前でカッコ付けるのが苦手なだけだ」

肩を竦めて言うのと呆れ顔は全員になった。

ありやりや、そんなに変な事言った覚えは無いんだけど。

少しは空気もほぐれたからヨシとしとくか。

「で、せっかくエース連中が来たんだし、誰か俺と一戦交えてみないか？」

「!?!」×8

この反応はどうやら俺達のヴォールク・データを見たようだな。
エースからすればあの映像は半信半疑ってトコだろう。

因みに、『あの時』は詳しく言わなかったが、俺は下層中盤辺りで
撃墜を判定食らっていた。

流石に武との二機連携とはいえ、撃震では無理があったからな。極
力戦闘は最低限にしてたけど、物量の前にはそうも行かず、気が付
けば孤立して敵に飲み込まれていた。

不知火に―ソレも武がパイロットでは距離は離されるばっか。
シミュレーターとはいえ、我ながら無茶な選択だったよ。

「嫌なら俺は見学でも――」

「大尉!!」

声を上げたのは速瀬水月。

初見から、コイツは好戦的な匂いがしていたが…乗ってきたか。
他の連中は何もいわず、伊隅がため息をついているあたり、喰い付
くと想像できたんだろう。

「アタシと勝負しましょう!!」

俺は、武から彼女達の評価を聞いた事がある。

『速瀬水月』―白銀武が知る限りで、最強の突撃前衛長。

卓越した戦闘技術と視野の広さ。『英雄』白銀の基盤となった衛士
だという。

ならば俺も興味が沸く。彼を尊敬する衛士として、多大な影響を与えたであろう彼女と戦うのは大いに意味がある。

「いいぜ、少しは楽しませてくれよ?」

管制を涼宮中尉に任せ、俺は着替えに行くとしよう。

さて、見せて貰おうか。

戦乙女の先陣を切る、その剣たる実力を。

戦乙女達は知らない。

“前の世界”で漆黒の『F-22A』を駆り、白銀に輝く『武御雷』

に唯一比肩しうる『彼』の実力を。

戦乙女達は知らない。

『銃神』と呼ばれた彼を。

ならば知るといい。

幾万の異形を屠る力、その身をもって。

生み出される『存在』（後書き）

次回『紅を纏う月』

彼女の視線の見据える先は……

紅を纏う月（前書き）

いるはずの無い二人に、守護者は戸惑う。

紅を纏う月

< 伍江 宏輝 >

「手加減してたつってもヤバかったな…」

さっきまでのシミュ戦を思い出して俺は一人呟く。

速瀬は正直強かった。

突撃前衛長の名前は伊達じゃないってわけか。

接近戦闘だけじゃなく、射撃も中々上手くて何度かひやりとさせられる場面もあった。

アレ程の衛士が“前の世界”では死んでしまっていたのか…美人とか抜きにしても本気でもつたいない。

三戦やって全勝はしたけど、後二、三年もしたら逆転しそうな予感がするぜ。

一戦戦る度にこっちの動きに追いついて来たり、先読みして攻撃してきたりと厄介この上なかった。

才能って奴は怖い。俺のような凡人には羨ましい限りだ。

去り際に「次は負けないわよー!!」とか言ってたけど、次戦はおそらくX M 3が完成してから。

考えたら余計に怖い…あの動きが30%アップとか、勘弁して欲しいぞ。

「俺ももっと鍛えた方がよさそうだなー。武との撃墜比が1:7と

か笑えねえ……」

今までの模擬戦とシミュ戦の戦歴の話だが、思い出すだけでヘコむ。因みに1が俺で7があいつだ。

あいつの場合は懐に入られた次点でアウト！！気が付けば撃墜判定されている。弾幕を掻い潜るなんて技術ドンだけループすれば習得できるのか検討も付かネエ。

本人の前じゃ言わないが、あれは掛け値無しの人材だろう。

動きの一つ一つが洗練されていて、まったく言っていないほど無駄が無い。その上機体に負担をかけない様にしてるんだか――

「ん？」

思考を止め、急に沸いてきた違和感に周囲を窺う。

――見られている。

しかも痛いほどの殺気のオマケ付きときた。

俺を監視しているようでもあるが、ちとコレはやりすぎだろう。こんなに殺気が漏れていれば場所は自ずと特定される。

目標は廊下の先、右手側の曲がり角にいるようだ。

207分隊の訓練を見に行こうと思っていたから、その道の途中にいるのであれば丁度いい。捕まえて話を聞くか。

「ーっ!!」

駆け出した瞬間、気配は消えていた。

逃がすモンか。と気合を入れ、角を曲がる。

ちっ…誰もいやしねえ。

何処かに隠れたんだろうが…まあいい。

いない奴を相手にするほど俺だって暇じゃないんだ。

今の奴はきつと任務か何かで俺の監視をしていたんだろう。ソレにしては随分お粗末なモンだったが。

多分、また出会う機会はあるはずだ。

殺気はあれど、本気で殺しに来るような感じではなかった。

仮に殺しに来たところで、武並の実力で無い限り返り討ちにする自信はある。

まあ例外が帝国にいる『斯衛』っていう化け物の集団だけど…流石に国連軍の中に『斯衛』がいるはずも無いんで、安心だろう。

一応後で武と副司令に相談してみっかなー。

さあ、気を取り直して美少女10人と美人な教官に会いに行こう!!

鼻歌を歌いながら廊下を進む伍江宏輝を、何処から現れたのか4人の人影が見ていた。

国連ではない紅い制服を身に纏う美女と、同じ制服だが色の違う3人の少女。3人の服は白だった。

一様に視線は厳しく、しかし完璧に気配を消してその場に佇む。

「未熟者め…気取られるとは」

3人を見ずに、彼女は吐き捨てた。

むしろあれ程の殺気だ、気が付かない人間がおかしいだろう。

言われた3人は、しゅん。となっている。

彼女達はまだ見つかるわけにはいかなかった。

昨日、突然現れた佐官と尉官。二人は香月夕呼の腹心だという。

その年齢に驚愕を覚えた。22歳で大尉。コレは“女狐”の任務と性格上（こちらの割合が強そうだが）ありえない事ではないだろう。多大な違和感が残るが。

しかし、18で少佐という事実には更に驚愕させられた。

どれほどの武功を立てればそのような階級になるといつのか。不自然極まりないといえよう。

そして二人の名前。

ソレを見たとき、彼女はすぐに城内省へと確認を取った。

―ありえない。否、あつてはならない。

『彼等』は生きているはずの無い人間。

仮に生きていたとしても、『国連軍』いてはならない人間。

特に、『彼』は―伍江宏輝は。

「二人の監視を怠るなよ。私は再び城内省に連絡を取る」

「了解!!」「」

三人の敬礼に答礼し彼女は自室へと急ぐ。

あの二人の目的は分らない。

だが、訓練兵達との接点を持った時点で、警戒を強めなくてはならなくなった。

杞憂であれば越した事は無い。

それでも万に一つの可能性も考えておかなければならない。

（冥夜様…）

敬愛する主人を想い、彼女は足を速めるのであった。

*

「おおーやってるなー」

突撃銃を持ち、グラウンドを駆け回る訓練兵を眺めてそんな事を呟く。

どうやら俺は射撃訓練中に来たようで、あちこちから銃声が響いていた。

遠目から見ても分かるが、彼女達のレベルは高い。
素早く、正確に的を射抜き、次へと移る。

神宮寺軍曹がいかにも優秀な教官か思い知らされるな。

「見事なモンだ、訓練兵にしておくのはもったいない」

「た、大尉!？」

気配を消して近づいたおかげで、後ろからイキナリ声を掛けられた
軍曹は慌てて敬礼をしていた。

「ご苦労軍曹。少し遠くから見ていたが、筋がいい者ばかりだな。
珠瀬と柏木が頭一つ抜けてる感じが」

全体的なレベルは高い。

その中でも今言った通り珠瀬と柏木の射撃能力は高かった。次点で
涼宮茜、鎧衣、榊、高原辺りだな。

他の連中も決して引けを取らず、訓練に励んでいる。

「ありがとうございます。大尉にそう言っただければあの子達
も喜ぶでしょう」

「調子に乗られても困るから、まあ折を見てな」

二人で、ふ。と笑いあう。

うーむ、この人はやはり美人だ。

凛々しい顔も笑顔も、どちらも等しく素敵だ。

訓練兵達に対する愛情も感じるし、その中に強い意志も見て取れる。こんな人に教官やつてもらえて、武達はさぞかし幸せだったろうよ。いや、武以外は現在進行中か。

まあ、これほどの人間に教導受けてて優秀じゃなかったら、そいつは才能がからつきしなのか、努力を怠っているかのどちらかだろう。

さて、視線を訓練兵達に戻して教官モードで動きを見ていく。

さつきも思ったが、やっぱり動きの一つ一つが速いな。

的を射抜く腕も差異は多少あるけど、正規兵にも劣らない。

なんか特に口出すような事ねーな…

…ん？ちと違和感を感じる。

動きはいい。射撃の技術もかなり正確だ。でもなんか引つかかるんだよなー。

俺の動きと比較してみるか。

「……」

「あの…どうかなされましたか、大尉？」

「少し気になった事があったな。悪いがあいつ等を集合させてくれ」

「はっ！！」

軍曹の吹く笛の音がグラウンドに響く。

訓練を中断し、訓練兵達が足早に集合する。

「敬礼!!」

俺を見て動揺しかけた彼女達だったけど、軍曹の号令で直に治まった。

ここら辺の機微は流石軍曹。決して俺が侮っているわけでもなく、こういう人がいるとホント助かります。

「少し訓練を見せてもらったが、驚いた。というのが正直な感想だ」

ざわ…

ざわ…

と動揺してるみたいだけど、なんか悪い方に取らせちゃったか。

「勘違いするな、貴様等の腕の良さにだ。特に珠瀬と柏木の腕は正規兵でもそうお目にはかかれないぞ」

名指して褒められた二人はえへへ、と言わんばかりに顔を綻ばせている。

ああ可愛い。どっちも撫で撫でしたい!!したいが自重せねば…

他の8人もナニやら言っただけそうなの表情ではあるが、とりあえずさっきの違和感から取り除いておこう。

「話は変わるが、涼宮訓練兵」

「はい!!」

びしつと敬礼を決めていい返事。

「貴様等の目的は衛士になることか?それとも歩兵になることか?」

「はい、いいえ教官殿。我々の目的は衛士になることです！
！」

「では桝訓練兵、衛士は生身でBETAと戦うのか？」

「いいえ教官殿。衛士は戦術機に乗ってBETAと戦います！！」

まあ戦術機が動かなくなったときは、バイルアウトして強化外骨格で戦ったりもするんだけど、そういう場合は今までの戦場での経験上100%死亡フラグなんでココでの説明は割愛しよう。

さて、訓練兵達と軍曹はどうやら俺の質問の意図を汲みかねてるようだ。

俺が感じた違和感。

それは、言ってしまうえば『速さ』だ。動きも、構えも完璧に近かった。

だが、構えてから発射までも同じように『速い』事に俺は違和感を感じたんだ。

最初はすげー。としか思っていなかったが、自分の動きと比較したときにその一点だけが明らかに違っていた。

要は戦術機に乗った事がある奴と無い奴の違い。この一言に尽きる。

「射撃の技術自体は問題ない、ソコは全員が自信を持ってもいい。だが、貴様等は訓練になれた撃ち方をしている。『戦う』ためではなく『訓練する』為の撃ち方だ」

どうやら軍曹は気づいたか、本当に優秀で助かる。

訓練兵達は完璧に理解はしていないようだが、ソレでも俺が言わん

とする事は重要だと各々が思い、真剣な表情で言葉を受け取っている。

「構えてから撃つまでの間隔が速すぎる。貴様等がいずれ乗るであろう戦術機にはロックオン機能といって実に便利なものが備わっていてな、今までの感覚で引き金を引けば無駄弾を使う事は確実だ。まずは当てる事、命中精度を重視するつもりで構えてから一呼吸置け」

「はい!!」×10

言葉の意図を汲み取り、その重要性を理解した彼女達の表情は、更に真剣なものへと変わっていた。

「貴様等が訓練に真剣に取り組んでいる事は見れば分かる。だが、訓練を完璧にこなす事がゴールではない。その先も見据えてしっかりやれ」

「大尉殿のおっしゃった事を念頭において訓練再開だ!!行け!!」

「了解!!」×10

全員が一斉に駆け出し、再び断続的な銃声があちこちで響き渡る。言われた事を直に実践しているようで、彼女達の優秀さと思いの強さが窺い知れた。

才能——一言で済ませてしまうのは彼女達にも失礼だとは思うんだが、全員がかなりの物を持っている。

正直羨ましいぜ…アレだけの才能、その少しでも俺にあれば…

武の奴にあんなにぼこぼこにやられずに済んだのにorz

「大尉、ありがとうございます」

そんな事を考えていると、軍曹がいやに硬い表情でそんな事を言うてきた。

礼に関してはさっきの指摘なんだろうが…

「言葉は受け取っておくが、何か不満でもあったのか？」

「いえ、何年も教官を務めてきて、あの事に気が付かなかったなんて…少し自己嫌悪してしまってます」

「ソレはいいつ等が優秀すぎたせいだな、吸収が早く、訓練に打ち込むあまりに動きが一定になってしまっていたんだろう」

あれで自己嫌悪なんて、真面目過ぎる気もするけど。
あんまり気にしてもらうのも気が引けるぞ。

「軍曹は実戦経験も豊富なんだろう？これからは実戦で気をつけなければならぬ事は訓練中に教えてやれ」

「了解しました、大尉殿」

やり取りの後、俺達は視線を訓練へと移した。

この後、武も訓練に合流したんだが、その表情は何故だか残念そうだった。
いったい何だったんだ？

<白銀 武>

207分隊の訓練の後、オレと宏輝はPXに来ていた。

まさか射撃訓練の指摘を既にしていたとは…自分で指摘できなかった事は少し残念な気もするけど、あいつ等のためになることだから気にしちゃいけないな。

でもコイツが直に気が付いたのは流石って所か、『銃神』なんて呼ばれてたのは伊達じゃなかったって訳だ。

「この後はどうするんだ？」

正面で月見うどんを啜る宏輝を見て、そんな事を尋ねる。

オレとしては座学やその後の格闘訓練も一緒に見ておきたいんだけど…

「ん〜少し思いついた事があるので、部屋に戻ってレポート纏めるわ」

なにやらしい笑顔でそんな事を言ってきた。

コイツの思いついた事って、今までもろくな事があつた試しがない。レポートって事は夕呼先生に何か提出する気か。

「何するつもりだよ…」

「そりゃ出来てからののお楽しみでしようよ」

嫌な予想が杞憂に終わる、何てことは無い。

多分コイツのアホな趣味を現実に変えるつもりだ。

「魔改造は止めておけよ」

ぴくん、と眉毛が動いた。

図星だ…小さくため息を吐いて鯖味噌定食に箸を伸ばす。

流石は京塚のおばちゃん。合成食でもキチンと美味い。

「でもよ、不知火じゃあ俺達の機動が生かせないだろう？」

今度はオレの眉毛が動く番だった。

確かに、腕を上げたオレと宏輝の腕では不知火は少し心許無い。贅沢を言えばオレは『武御雷』が欲しいし、宏輝だって『F-22A』が欲しいはずだろう。

とはいえどちらも現実的じゃない。『斯衛軍』にしか配備されない『武御雷』、米国でも少数しか先行配備されず、エリートにだけ行き渡る『F-22A』。

夕呼先生の下にいるとはいえ、頼んだから「ハイドウゾ」とは行くわけもなく…

「ぐ…確かに…」

結局出来る事といえば呻くだけ。

それでも今手に入る機体の中じゃ不知火は優秀だ。帝國の最前線ですら殆ど配備されていない物をまわしてもらうんだから文句も付けようが無い。

「言つとくが、流石に俺だつて“あの二つ”が手に入らないつて事は理解した上での改造案なんだぜ？」

その改造を行う余裕が今現状であるかどうかが問題だと思うんだが…けどオレと宏輝が初めて会った時よりも、施設からナニからまだ充実している。むちゃくちゃな改造案を出すなら今しかないつて事か。

「現実的なんだろうな？」

「なら出来上がりはまずお前が確認しろよ」

「変形・合体とか無理だからな？」

「ちっ…」

「舌打ちすんな!!」

不満そうに残りの汁を啜り、宏輝はココからが本題、とばかりに真剣な表情になる。

「気が付いてるかも知れねえが、監視されてるぜ」

「……」

心当たりはあった。と言うかアノ人達以外にはありえないだろうな
！。

オレの頭の中に彼女の姿が浮かび上がった。

紅を纏う守護者。

主を敬愛し、害なす存在を消し去る事を躊躇わない彼女。

紅の『武御雷』を駆る姿は正に武神と表現するに相応しい。

どの平行世界においても、自分に随伴できる数少ない衛士の一人。

――月詠真那。おそらくその人。

まだ接触はして来ないだろうが、来たとしてもソレはもう自身の中
で慣れてしまった事件の一つでしかない。

よく考えれば、宏輝はおそらく“アノ問いかけ”は初めて。誤魔化
すのは上手い奴だが先手を打っておく事は悪い事じゃないだろうな。

「多分…ソレは斯衛だ」

「げ…何でんな奴等が国連軍の基地にいんだよ」

コイツ、“前の世界”で帝國軍にいたとか言っただくせに、気が付
かなかったんだろうか。

「め――御剣を見てなんとも思わなかったのか？」

思わず名前と呼んでしまいそうになったけど、ぐっと踏みとどまっ
た。

対して宏輝はむ。と唸る。

流石にココまで言えばコイツでも理解できただろう。

「髪型が不思議だ…としか。後はアノ中じゃ一番美少女だって所だな」

聞いてねえよそんな事…

てかそんな理由で斯衛が監視に付く理由はなんだ…

本当に思い当たる節が無いのか更に唸っている。

飯に知っててもこいつの事だ、他の帝國軍人や斯衛と違って敬う心は持ってなかったんだろうな。

「殿下に似てると思わなかったか？」

その言葉に、ようやく納得がいったのか一人でうんうん頷いている。

「生き別れの妹か？」

確信付きすぎだろ…

聞かれちゃ不味いと分かつてはいるのか小声だった。

「そこら辺の詮索は無しだ、まあ斯衛がいるっていうのはそういう事」

「なるほどねー、確かにイキナリ現れた佐官と尉官が訓練兵の教導に関わる…しかも自分の主人がいるってなりや警戒もするか」

話が早くて助かるんだけどその後に「俺が護衛ならそんな怪しい奴等即射殺だなーあははー」とか怖い事を言っていたのは忘れよう。念を押しておくことはもう一つあるんだ。

「後とな“この世界”では俺、『白銀武』は死んでるんだ。多分『

伍江宏輝』も…」

そうでなくてはコイツは“この世界”に来れなかったはずだ。

「死人がいるのはおかしいってか…」

何の感情も見せることは無く、ただ呟いて合成玉露を飲む。

宏輝の事だからもう少しリアクションがあるものかと思ったけど…

“その事”で前に何かあったんだろうか？

「斯衛に何か言われても上手く誤魔化せよ？お前なら簡単だろう」

「喧嘩吹っかけて来なけりやな」

ソレは無いと断言できる。

コイツが冥夜にてを出したりしない限りは警告からだろう。

まあ……冥夜に手を出したらオレがタダじゃおかないけどな。

「くれぐれも気を付けろ。じゃあオレは座学に顔出してくる」

「あいよ。改造案はX M 3のバグ取りの前までには持っていく」

食器を返却してオレ達は別れた。

座学では出る幕無さそうだけど、衛士ならではの応用問題ぐらいは出してやれるだろう。

例題を考えながら、オレは座学の教室へと急ぐ事にした。

今の段階で斯衛の4人に実害は無い。

白銀武はそう思っていたからこそ、彼女の存在に気が付かなかった。伍江宏輝は別の思惑から、彼女の存在を無視していた。

2人の去ったPXに紅い彼女は居た。

出口に視線を置き、その表情は厳しく―そして悲しい。

城内省からの返信は早かった。

『白銀武』と『伍江宏輝』の両名の死亡は確認された。しかし、国連軍のデータベースでは死亡の事実が改竄され、あの2人は生存している事になっている。

全ては『女狐』の仕業だという事は容易に理解できた。

だが、何故今になってわざわざデータを改竄する必要があったのか。3年前に死んだはず『白銀武』と2年前の『あの作戦』で死んだは

ずの『伍江宏輝』。

その2人が何故今になって姿を現したのか。
そこに想像の及ばぬ事象があった事など彼女には知る由も無い。

「何故… 生きているのだ、宏輝…」

その呟きに答えるものは居らず。
彼女はP Xを後にした。

歪んだ因果を2人は知らない。

“この世界”の自身が何者であったのか。

ソレは書き換えた魔女が知っている。

だから、2人はまだ知らない。

その事実が“今まで”と違う事を。

歪んだ因果が作る未来は誰も知ることが出来ない。

紅を纏う月（後書き）

次回『“夢”と“疑惑”』

見知らぬ記憶、知らない自分……

『夢』と『疑惑』（前書き）

それはただの夢なのか？

彼はいまだ知らず。

『夢』と『疑惑』

<白銀 武>

「いや…確かに面白い構想だとは思っけどよ、やっぱり主機の出力も合わせて上げないと効果薄いんじゃないか？」

「あー、問題点はそこか。エンジンや各部位のアクチュエーター、フレーム強化も考えると改造案ってーより新型を作った方が効率的だな」

「お前にしちやよく考えたって所だけど、コレじゃあ準第四世代戦術機構想になってるぞ」

「そっちの線で考えた方が早かった気がする…」

夜、宏輝の持ってきた魔改造案を広げながらお互いに意見を出し合う。

何時かの時みたいに変形・合体とかビーム兵器案だったらぶん殴ってたけど、今回は随分とマシな物を持ってきたな、こいつ。

理想の機動を実践する為には、どうしたって機体の速さと耐久性が問題になってくる。

XMM3を搭載すると、線の細い第三世代の戦術機は思った以上に機体に負荷を溜め込んでしまうのが問題点だ。

不知火なんかに大型の噴射跳躍システムなんか取り付けたら、加速の時点で一気にダメージを受けかねない。

まずは機体自身の強化、もしくは開発から始めるべきだとオレはさつきから主張していた。

宏輝は改造に拘ってる様だったけど、色々と案を出してる内に新型構想へと路線転換しようとしていた。

「X M 3 搭載前提の戦術機関開発案を作った方がよさそうだなー」

「まあ仮に案が通ったとしても実用化までは結構かかると思うぞ？」

「ベースを撃震にしてみたらどうよ、アイツは発展性もあるし耐久はピカイチだから俺の無茶な要求もかなえてくれそう」

確かに、整備環境も整っていて、ある程度の発展性と機体耐久度を兼ね備えた撃震ならこの改造案に相応しいかもしれない。

だとしても問題点は、やっぱり主機の出力がスラスタや噴射跳躍ユニットの出力に劣るであろう事実。

エンジンを総換えしないことには要求性能を満たさないんじゃないかと…

「もう少し煮詰めてから夕呼先生に提出した方がいいんじゃないか？穴がいくつもあると食い破られるぞ」

うぐ、と宏輝は言葉に詰まってしまった。

まとまった案で興味を引かない事には夕呼先生は釣れないよな。

逆に言えば完成された案であれば、その有用性を語って、開発まで漕ぎ着ける事は出来るかもしれない。

「だよなー、まあこの件はまた助言頼むわ」

「了解。後日話し合うつて事で、シミュレータールームに行きます

か
」

書類を纏めて立ち上がる。

これからX M 3のバグ取りと機動パターンの入力をやる事になっている。

何とか二日で終わらせて、A - 01とまりもちゃんの座学・教導も進めなきゃならない。

完成のお披露目にはトライアルも計画してあるんでオレ達の責任は重大だな。

ソレが終われば、交渉材料として各国との腹の探り合いを夕呼先生に任せなきゃならない。

なんにせよ完成させることが第一の目標。

「さて、まずはX M 3だ」

*

開始の時間が2200と結構遅い時間だったので、今日は3時間ほ

どでチェックを終わらせておいた。

BETAを2000体近く配置した市街戦や、障害物のまったく無い平地戦。宏輝との模擬戦を10回、ヴォールク・データの難易度の低いパターンを2回。

随分急ぎ足だったけど、2人で行ったおかげもあって予想以上のデータが取れたみたいだ。

その分、霞と夕呼先生、ピアティフ中尉には負担をかけちゃったけど遅くまで協力してくれた事は本当にありがたかった。

特に霞はすごく眠そうだったので、精一杯感謝の気持ちを込めて頭を撫でてやったら嬉しそうに頬を染めてくれていた。隣で馬鹿が1人、「コレが伝説のナデポか…」とかほざいていたけど無視するに限る。

「あんた達…化け物だわ…」

操縦ログを眺めながらため息を吐く夕呼先生。

オレは苦笑いするしかない。

市街戦・平地戦で光線級・重光線級が犇ぐ中、オレが跳躍したとき、モニタールームに居た3人の息を飲む音が聞こえた。

常識で考えればありえない動きだろう。

でも、X M 3のおかげでキャンセルが使えるようになった事によって、光線照射の恐怖は、少なくともオレの中では完全に消えていた。

ブリストタイプ

噴射跳躍からキャンセル噴射降下しつつ足場の確保のために36mで周囲の敵を一掃。その間に宏輝は照射インターバルに入った光線級・重光線級を確実に打ち抜いていた。その2種を相手取りつつも、周囲から襲ってくる要撃級・突撃級・小型種を同時に撃ち殺す技術はそうそうお目にかかれるものではないだろう。オレも負けて

はいないが、あいつは異様に視野が広い。背中を任せるには持つて来いの衛士だ。

役2000体を全滅させるまで10数分。完成形じゃないXM3なら上出来だな。

余談だが一番時間がかかったのが宏輝との模擬戦だ。因みに戦歴は7勝3敗。

22歳になる男が涙目で睨むとか気持ち悪いので止めて欲しい。歳が上だろつと、部下に負けるのは上官として勘弁したい話だからな。

「まあこれぐらいはやれないと。『英雄』って呼ばれてたのは伊達じゃないですよ」

「へえ、大層な呼ばれ方してたのね」

オレにとってその呼ばれ方は皮肉でしかない。

敵を殺す事は出来ても、大切な人達を護れないオレにとっては実感の沸かない言葉だった。

『英雄』なんて肩書きが欲しくて戦った訳じゃないんだ。ただ護りたかった。それだけなのに、その全てはオレの掌から零れ落ちてしまった。

虚しい称号だ、自責の念を駆り立てるぐらいしかオレには使い道は無い。

最も衛士の流儀がある以上、仲間の死を思つて泣き崩れるなんてみっともないマネはそうそう出来ない訳なんだが。

「白銀さん……」

気が付くとオレの右手は霞に握られていた。
眠そうだけど、すごく心配そうな顔でオレを見ている。

ダメだな、暗い事ばかりじゃなくてもっと前抜きに考えないと。
優しく手を握り返して笑う。

「大丈夫だよ、霞。今度こそ守って見せるからな」

「はい…頑張ってください…」

「今日はお疲れ様、ゆっくり寝てくれよ？」

「あらー白銀くあたしやピアティフも疲れてるんだけど、労いの言葉は社だけかしら？」

ニヤニヤとこっちを見ながら夕呼先生は意地悪く言ってきた。
遅くまで付き合わせたのに機嫌が悪くないって事は、X M 3の有用性を実感してもらえたんだと思う。

オレ達の腕が衛士としてトップクラスだとしても、今見せた戦果は相当なものだったろう。

ま、そうでなくちゃ困るんだけど。“今回は”予想以上に喰い付いてくれてよかった。

「先生や中尉にも感謝してますよ。明日はP Xで飯食った後に完成まで持って行きたいと思います」

「そ、こつちもそれなりに手は尽くしてあげるわ。そこそこ優秀な駒が減らないのはありがたいし話だし」

「はゝ…もしかしてA・01の事っすか？あんだけの衛士をそこそこ優秀とおっしゃいますか、副司令…」

「ナニ言ってんのよ伍江？あんだ達の腕を見た後だったらそう思うのも道理でしょう」

宏輝の奴は昼前に速瀬中尉と模擬戦やってるんだっけか。

あいつの中でA・01の皆の評価はかなり高くなってるみたいだな。それと、今の言い方だと夕呼先生の中でオレ達の評価は最上みたいだ、そのことに不満は無い、むしろありがたい話だ。もう十分信用はされてるんだろうけど、信頼されるに越した事は無い。流石にただの駒扱いは困るけど、現状でその心配は無いみたいだし。

「それじゃ先生、また明日もよろしくお願いします。」

「お疲れ様でしたー」

「はいはい、それじゃあね〜」

片手をひらひらさせて夕呼先生がシミュレータールームを後にする。ピアティフ中尉は小さくお辞儀をしてそれに続いた。

「お休み、霞」

「じゃあなー」

「はい。白銀さん、伍江さん…お休み…なさい」

最後に霞がぺこり、と一礼して去って行った。

見送った後着替えに行こうかと宏輝を見たら――

「なんで泣いてるんだよ、お前…」

「ふ…分かるまい貴様には…社が『俺に』挨拶してくれたんだぞ！
」

「なぜ自分だけを強調する…」

「いや、なんか“前の世界”では妙に避けられてたからな…」

その理由には思い当たる節がオレにはあった。

「イヤラシイ目で見てたからだろ？」

「その発言には異議を申し立てるZ E！！」

「霞から直接聞いたんだけどな、胸とかお尻とか見られてるって」

後ろめたい事でもあるのか宏輝はオレから視線を逸らした。

“前の世界”で宏輝がであった霞は20歳ぐらいの時。その頃の霞は背も伸び、スタイルも抜群になっていた。視線を奪われる気持ちには痛いほど分かるんだが、その時コイツは30前後じゃなかったろ
ーか…

なんともお盛んな奴だ。

「今度は上手くやるさ」

リーディング持ちに上手くも何も無いとは思っただけど、本人がそう言ってるならオレから言う事は無いだろう。

それ以前に視線でばれだつて事に気が付いてないんだろうか？
無いんだろ？な、こいつ基本馬鹿だし。むしろ気づかれてても実行
する猛者だ。

考えるの馬鹿らしくなつてきたからこの件はコレで切り上げよう。
もういい加減オレだつて眠たくなつて来ている。さつさと着替えて
部屋に戻りたい。

「とりあえず、明日もよろしく頼むぜ」

「あいよ、んじゃシャワーでも浴びますか」

談笑しつつオレ達は更衣室へと向かう。

結局この日ベッドに入れたのは0200より少し前だった。

< 伍江 宏輝 >

夢を見ていた。

どんな夢かつて？別段面白いもんなんか何も無いような夢だ。

衛士に宛がわれる質素な部屋で男と女が会話している。ただそれだけ。

夢の画像は荒く、2人がどんな奴なのかよくわからネエ。声もノイズが入って途切れ途切れだった。

どうせならハイビジョンで頼みたいところだが、使えねーボロいテレビみたいだ。夢つつーのはもっとご都合主義かと思ってたけどない。

< 次 — 明 — 戦 — お前 — か？ >

< 国 — 軍 — が — るさ >

会話してるようだけど訳が分からん。心配そうな女と無理に明るく振舞う男…か。

何でしょうな、この安いドラマみたいな展開は。お涙頂戴系の話は“この世界”には腐るほど転がっている。親が恋人が友人が…望む

にせよ望まないにせよ、衛士となり戦い散っていく。

自分の部隊でも多く見てきた。その他の隊でも飽きるほど聞いてきた。

まあ夢に見るって事は、自分の体験談か聞いた話なんだろうな。今更こんな事を思い出すとは、未練のある女なんていたっけ？

なんて、そんな事をぼんやり考えてたら、話も佳境に入ったのか女は男の胸に顔を埋めていた。

涙は流していいところを見ると、この女も衛士か……

どうも男が行く戦場で開始される作戦は、あまりいい状況のモンじゃないらしい。

ん？仮にコレが俺の記憶にあるものだとして、こんなシュチュエーションはあっただろうか。

記憶力はいい方だけど、まったくもって記憶に無いぞ。

<必ず——は——みせる!!>

<ああ——事——な?>

ダメだ、思い出せねー。

お、夢が終わりに近いのか意識が浮上するような感覚が俺を襲う。

<任せて置けよ、俺を誰だと思ってるんだ?>

何でまたイキナリ音声だけクリアになるんだよ。

どうにも意図的臭い。誰が何の目的で俺にこんな夢を見せる?、てかこんな事してメリットあるのか!?

で…だ。この男の声には聞き覚えがある。

<ふ、愚問だったか？>

毎日聞いている声だしな。嫌でも理解しちまうだろ！！

<『黒い銃神』は伊達じゃないぜ！！>

“俺”じゃねーかよ、ちくしょう！！

俺の声だよ！！意味ワカンネー！！

夢から覚めるほんの一瞬だけ、映像もクリアに見る事が出来た。

其処にいたのは黒い『斯衛軍』の制服に身を包んだ“俺”と――

<帝國を頼んだぞ。宏輝>

――紅を纏う“彼女”の姿だった。

*

言わずもがな目覚めは最悪だよ…

今までの平行世界ループで俺が『斯衛軍』に入隊した事は無い。
コレは断言できる。

何故かって？

だって俺、『斯衛』嫌いだモン！！

すいません。いい歳こいてモンとかホント死にたいorz

まあ、斯衛が嫌いなのは事実だ。あの、殿下さえ良ければっていう考え方がどうにも合わない…何するにしたって自国優先だしさー、そこら辺は某米国さんとか他の国もなんだろうが、このご時世でまだソレを言うかと思うのが本心な訳で。

俺自身に崇高な意思って奴が無いから余計に反りが合わないんだろうけど。

何処も彼処も馬鹿ばっかで頭痛いぜ。今一番脅威なのはBETAだ
って分かってるくせに、足の引っ張り合いには余念がないとかどう
なのよ？

10年先も儘ならネエってのに……

ああ、そんな事より夢だ、夢。

「ありえないだろ、あんなトコ入隊したら息苦しくて死んでしまうわ」

帝國軍でさえ規律は厳しく、礼節は重んじていた。規律が厳しいのは何処の軍隊も同じだろうが、礼節に関しては勘弁して欲しい。斯衛軍は特にそうだ。模範たれ、とか意味分からん。

「ありえないと思うが…見辛い割には妙にリアルな夢だった」

抱きしめた女の温もりさえ感じ取れそうならいにはリアルだった。“外”から見てるってのは感覚的に分かってはいるんだが、だつてのにまるで自分が喋っているかのような…コレは間違いじゃないか、実際に喋っていたのは“自分”でやけに言葉がすんなりと入ってきた。

色々問題はあるが、一つは女の顔が自分の知らないものだった事。

美人ではあった。なら俺が覚えてないなんて万が一にもありえないでも知らん。

「嫌な予感がひしひしとする……副司令に報告しておいた方がいいかね……」

ソレとあわせて“この世界”での俺がどうなったかも聞いておこう。十中八九死んでるんだろうが、俺が知りたいのは死ぬまで何をしていたかだ。

まあ検討は…今付いたんだが。

出来れば間違いであつて欲しいけど、夢にまで見たんだ。

先は見えている。

ため息を付きながら備え付けの時計に視線をやる。
起床ラッパが鳴るまで後20分か、とりあえず着替えて洗顔だな。

「ふいー。さっぱりした」

タオルで顔を拭いているとちょうどラッパが鳴っていた。
少し早い気もするが、PXでさっさと飯を食うことにしよう。

その後にはX M 3の仕上げのためのシミュ地獄が待っている。
まあ嫌いじゃないから問題は無いんだけどね。

「ん？」

俺がドアを開けると同時に右隣のドアが開いた。

そっちは武の部屋だ。

アイツがコレぐらいに出てくるのは珍しい。

「おはよう。 たけ……………る？」

多分、この時の俺はさぞ間拔けな顔をしてただろう。

ドアからぴょこ、と出てきたのはウサ耳。

銀髪的美少女——社霞だった。

俺と目が合つと一瞬びっくりしていたが、丁寧にお辞儀をしてくれる。

「おはようございます」

「おお…おはよう？」

なんで疑問系だ、俺！！

思考が追いつかんぞ。何故にウサギっ娘が武の部屋から……

「どうした？霞」

部屋の中から出てきた武。

で、俺は見えてしまった。というか今までドアで隠れてよく見えていなかったのだが…

武は社と“仲良く手をつないで”いた。

「テメエエエエエエツ！！其処まで堕ちたかあああああああ
！！！！！！」

「勘違いしてんじゃねー！！」

この一件により、俺の武への評価は『尊敬できる上官兼友人』から『尊敬できる上官兼友人（ロリコ）』へと昇格した。

べ、別に羨ましかった訳じゃないんだからねっ！！

つづく

『夢』と『疑惑』（後書き）

次回『寄り道』くそれはある朝の喧騒＞』

僅かな安らぎのひと時。戦士たちは羽を休める。

寄り道くそれはある朝の喧騒く（前書き）

朝のひと時。
僅かな休息。

寄り道<それはある朝の喧騒>

< 伍江 宏輝 >

「うぐぐ… 痛え…」

少しばかり腫れてしまった頬をさすりながら、俺はPXの席に着いた。

目の前には、鯖味噌定食を持った武と、おんなじメニューで武の横に座る社霞の姿が。

「自業自得だ、イキナリ襲い掛かってきやがって」

「喧嘩、良くないです…」

呆れた顔の武、心配そうに俺達を見る霞。

言わんとすることは分かる。だが、アノ光景を見れば誰だってあらぬ疑いをかけるに決まってるだろう。霞と手をつないで自室から出てくるという光景を見て、少し頭に血の上った俺は、思わず武に殴りかかったが、綺麗なクロスカウンターで撃墜されていた。

そのまま暫くダウンしていたため、どうも引きずられてPXの入り口近くまで来ていたようだけど… まあソレはいい。

「しかたねーじゃん、流石にアレはねーよ」

「激しく誤解だ。お前が考えてるような事は一切無いぞ」

「……ほう俺が考えてる事とな？」

せっかくの合成ざる蕎麦だが、まだ食う気はせず、合成緑茶をすりながら目の前の上官を半目で見る。

「どうせ碌でもない事考えてたんだろっが」

「じゃあナニしてたんだ、お前？」

ほんの少しだけ思案し、武はこれ以上突っかかれても面倒だ、とばかりに今朝の状況を話始めた。

*

ゆさゆさ

「むう……」

なにやら揺すられている。

ぼんやりと浮上する意識で、最初に思ったことはそんな事だった。今だ半覚醒の状態、理解しているのは自分が布団の中だという事だけ。

ゆさゆさ

「ん……？」

目を開けると天井の光が視界に入る。

ソレともう一つ。

自分の部屋にはいるはずの無い人物の姿が。

「かす…み？」

ゆさゆさ

目が覚めてしまった。そしてこの経緯に思い至る。自分は―白銀武は様々な“平行世界”において社霞に朝は起こされていた。初めて顔を合わせた時に、その記憶を読み取って彼女はココに来たのだろう。

もう少し寝ていたい気分ではあったが、せっかくこうして『また』来てくれたのだ。ココは素直に起きて御礼を言うべきだろう。

「おはよう、霞」

「起こしてたんですね…私…」

「ああ、世話になってばかりだったな…ありがとう」

ソレは“こっちの霞”に言うべき言葉ではない。そう思っていたのに自然とその言葉が口から出ていた。

気分を害してはいないだろうか、そう考えていたら霞が思いもよらない事を言ってきた。

「これからも起こしに来てもいいですか？」

「ソレは嬉しいんだけど…大丈夫なのか？」

「はい…博士から許可してもらいました」

「夕呼先生が…？」

嫌な予感。と言う訳でもないのだが、武は少し考え込む。

霞の提案であれば断る事などしない。きっとこの話を聞いたときの夕呼先生はさぞやイイ顔をしていただろう。後で色々言われる事を覚悟しなければならぬかもしれない。

「ダメ…ですか？」

「いやいや、嬉しいぞ霞。これからもよろしくな」

悲しそうな顔を始めた霞に慌てて声をかける。いかに夕呼先生からのからかいが恐ろしかろうが、こんな可愛い子に悲しい顔をさせるのは間違っている。

それにしても、と武は思う。昨日は遅くまで作業させてしまい、さぞ眠いだろうに。わざわざ自分を起こしに来てくれるとはなんともありがたい話だ。それに今日も長い時間X M 3のバグ取りなどで彼女に負担を強いてしまう。人類のためにソレが必要不可欠ではあるが、なんとも申し訳ない気持ちになってしまった。

このままただ帰してしまうのではいけない、と思いダメ元で霞に話を持ちかけてみることにしよう。

「なあ、良かったらこのまま一緒に朝飯食いに行かないか？」

びよこ、と頭のウサ耳が動く。

コレも思い出作りの一つだ。

「……はい」

少し間があつたが彼女は頷いてくれた。

思わず笑顔になるがふと疑問が一つ。

「先生に報告つて言うか、勝手に決めちゃっても問題ないのか？」

彼女は存在・持って生まれた能力から『歩く機密』である。

連れて行くのであれば、どうしても許可が要るのだが。

「大丈夫です」

そう短く告げられた。

驚いた武に霞は理由を話し始めた。

なんでも、理論を武に貰つてから香月夕呼の機嫌はすこぶる良く、気持ちに余裕も出てきているのだという。X M 3の件も、何だかんだと文句を言いながら殆ど一人でやってしまったのだとか。その分霞が暇になったので―霞から白銀武の“他の平行世界”の記憶を多少聞いていた事もあって、僅かばかりながら自由行動が許されたという。

外出やあちこち歩き回る事は出来ないが、武の部屋に來たり、一緒にご飯を食べる事は問題ないそうだ。むしろ武とは一緒にいろ。と

推奨されたと言っていた。

「そっか…まあ顔洗ってくる」

昨日…と言うか今日の深夜、シミュレーターが終わって、シャワーを浴びてから部屋に戻ると着替えるまもなく寝てしまった。だらしない気もするが服はこのままでいいだろう。

直に顔を洗って、寝癖などを整え一応の準備は完了だ。起床ラップも鳴っていたし、少し早いがPXに向かうことにする。

「行くぞー霞」

小さく頷き、武の隣に来た霞はおもむろに手をつないできた。

「え？」

「これがいいです…」

流石に戸惑う武だったが霞はつないだ手を離そうとはしない。嫌というわけでは無いのだが、中々気恥ずかしいモノがある。だが抵抗は無意味。何だかんだで武は彼女のお断りを断る事は出来ないのだ。

いくらループで女性関係等が経験豊富になったとはいえ、根っこの部分はそう変わるものではなく、彼は相変わらずも女性関係はヘタレだった。

武は苦笑しつつその手を握り返した。少し嬉しそうな霞を見ていると心が和む。

—さあ、PXに行つて食事をしよう。

ドアを開けると、霞が手を引いて出ようとする。

一緒に食事が出来るのが、彼女は楽しみだった。

食事はいつも一人か博士と取る。それ以外の人とは接点は多くないし、個人での行動範囲は限られていたから。

シンダーに浮かぶ『彼女』をリーディングすると、楽しそうにご飯を食べる光景を見る事が出来た。家族と、友人と、そして白銀武と幸せそうにご飯を食べる…

その——言つてしまえば『夢』が叶う事が、彼女の行動を逸らせた。

この時、白銀武と社霞は失念していた。

自室の隣にもう一人いる事を。

その彼が、不真面目な外面とは裏腹に早起きだと言つ事を、武は失念していた。

だから、ドアから出た霞が誰と話しているか最初は検討が付かなかった。

「どうした？霞。」

怪訝に思い自分も外に出た瞬間——

「デメエエエエエエツ！！其処まで堕ちたかあああああああ

「！！！！」

伍江宏輝が叫んでいた。

「勘違いしてんじゃねー！！」

涙を流しながら飛び掛ってきた宏輝にクロスカウンターをお見舞いする。

綺麗に決まった一撃は、容易に馬鹿の意識を刈り取っていた。

深いため息を付き、空いた手で宏輝を引きずりながら武はPXを指す。

隣で霞が心配そうにしていたが、笑って誤魔化す事にした。

*

「で、今に至るわけかよ……」

引きずってきたのが社なら俺の心も和んだだろうが……まあそれは流石に無理か。

「ってーか……お前さ、一人じゃ起きれねーのかよ」

残ったお茶を流し込み、そう尋ねてみた。

俺が知っている限りではそんな事はなかったはずだ。“前の世界”では実際一人で起きて……アレ？

「んな事は無いぞ」

現に起こしてもらってる奴が言っても説得力は皆無だ。

ふと、武と社を見ていて、俺は思い出したことがある。

コイツが一人で起きて来た所を、よく考えてみれば見た事が無い。
ソレは何故か？

必ず隣に社霞の存在があつたからだ。まあ早い話、この二人は一緒に寝ていた。だって“恋人同士”だったからな…

コツチのウサギっ娘が小さくて忘れてたぜ。
まさかこんな時期から仲を深めていた事には正直驚かされたけど…

「霞の好意を無駄にしたくないからな」

「なるほどねえ…」

ま、これ以上突っ込むのも野暮だろう。

さっさと飯を食って仕事に励んだ方が精神衛生上よろしい。変な想像すれば社に読まれちまうしな。

「…いただきます」

声を合わせて感謝の挨拶。

俺が“この世界”に来た当初は知らなかったけど、三食キッチンと食えるのは兵隊か特権階級の人間だけだと聞いてスゲー驚いた記憶がある。

まあ食えるものは合成食品で、味も褒められたモンでもないが、そ

れでも食事が取れるっつーのは特別なんだと。

今まで普通に飯食ってきて、感謝の気持ちを持ったことなんて無かった。

地獄みたいな“この世界”に来て、食事のありがたさを知るなんて情け無い話だ。

そう思ってから日は日課になった。自分の気も引き締まるように感じるしな。

「今日のバグ取りが終わったらまた改造案出すの手伝ってくれよ」

「んー、夜は用事があるから今日は無理だ」

合成山葵と麺ツユを合体させる手を止めて、武を見る。
用事とか抜かしたかコイツは…

「副司令にでも呼ばれたのか？」

ソレもあつて社が朝から来た。とかなら話は分かるが。

「いいや。ただ話したい奴がいるんだよ」

「なんだ…207分隊の奴等のフラグでも立てに行くのか？」

「フラグってお前、物事そういう風にしか捉えられねーのか」

迫力のある眼力で睨みを効かせ、武は味噌汁を一口。

この男の207分隊への気持ちの入れようは、初日に見たが、ハッ

キリ言って異常だと思う。

全員を見る眼が、異様に優しいんだ。教官の立場もあるんで、おくびにも出さねー様にしてるみたいけど。
ループで彼女達に何度も会ってるにしてもなー。

「怪しいねえ……」

「言ってる、ボケ」

互いに軽口を叩きつつ、食事を進める。

と、俺は気が付いてしまった。社の箸が全然進んでない。
というか、少し落ち着きが無いように自分の鯖味噌と武を交互に見てる。

……武は気が付いていて、気にしない振りをしてやがる。はて？
いつものアイツなら「どうした。」と声ぐらい掛けてやるはずだ。

「どした？嫌いなモンでもあったか？」

「ばっ！？」

親切で社に声掛けたつもりだったんだが、何故武が焦る必要がある。

で、社は俺の言葉にふるふると首を左右に動かしている。

余計分からん。んじゃ何でまた食わないんだろーか？

「……………白銀さん」

意を決したように（何故か）武を呼び、社は箸を手に取り、鯖味噌を一切れ掴んで――

「あーん」

武に向かって差し出した。

「うえ？（。んん）」

ゴメン、俺の脳ミソでは理解がおいづかねえ……

「あああああ」

そして、当の本人。武・The・RO
RI KON は頭を抱
えていた。

<白銀 武>

「あーん」

霞が差し出した鯖味噌を、オレはまともに見る事が出来ない。
正面の宏輝は思考が追いついてないのか啞然としてるし…

朝、霞が起こしに来たときから、飯時に何時かされるんじゃないだろうかって予想はしてた。

言っておくけど、コレが目的で朝飯に誘ったわけじゃない。
でもまさか初日から「あーん」が来るなんて、流石に予想の斜め上をいかれた感じだな。

いつもよりも早い時間にPXにいるからまだ人少ないけど、何人かはチラチラこっちを見てる。

「か…霞、そーいうのは…」

「あーん」

引かない。

そついや霞は結構頑固なところがあつたなあ。

「いや、自分で食べ…」

「ダメ、ですか？」

ああ！？涙目にならないでー！！

小さな瞳にじわ、と涙が浮かんでくる。

鯖味噌を自分の皿に戻し、俯いて肩を落としている。

そんな悲しい顔をさせたかった訳じゃないのに、自分の安いプライドで拒否するなんてダメだよな。

霞が喜んでくれるんだったら、少しぐらい恥ずかしい思いをしてもいいじゃないか!!

というか、そう思わないとオレがやっていけない。

「そんな事無いぞ、霞。う…うれしいな」

ぎこちない気がするけど笑顔を浮かべる。

「白銀さん… あーん」

顔を綻ばせて鯖味噌を掴み、オレに差し出してくる。
覚悟を決めよう。逃げる訳には行かないんだから。

「あーん。ぱく」

（ A ）！？

↑ 宏輝

正面の悪友件部下がもの凄い顔をしてるようだけどあえて無視。
PXも静まり返ってる。

空気が痛い……ひそひそと会話するのはやめてー（泣）

「美味しいですか？」

「あ、ああ美味しいよ」

霞が喜んでくれるのはオレも嬉しい。嬉しいけど、その引き換えになる物が大きい気がする。

気をよくした霞は、もう一切れ鯖味噌を掴んで差し出してくる。
食うしかないよなあ。一回やっちゃったら後はもうなし崩しだ。
差し出された鯖味噌に食いつき——と、視界の隅に見知った顔を見つけてしまった。

A - 01の皆……

約一名を除いて驚いた表情を浮かべている。まあその一名ってのは宗像中尉なんだけど。

ああ、美人なのにニヤリ笑顔が良く似合う。なんて現実逃避もままならないよな。

「どうかしたんですか？」

「あー……」

彼女達がどっかに行ってくれるならまだしも、手に持ってるトレイが今から食事するんだ、と言う何よりの証拠。

覚悟はしてた。してたけど、逃げ道の無い現実になんと涙が出てくる。

「おやおや白銀少佐、随分と楽しそうな朝食ですね」

……やっぱり。一番最初に声を掛けてきたのは宗像中尉。

一応敬礼を忘れてないって所は流石だな、なんて思ってしまう。

「何か言いたげだな、中尉」

このまま向こうのペースに巻き込まれるのも癪だったんで、少しばかり威圧感を込めて言葉を発してみた。

視線と言葉を受けて、宗像中尉はびくつ、と身体を振るわせる。額に冷や汗、泳ぐ視線。予想以上に効果は抜群だ！！

と、正面で呆けていた宏輝も、何故か姿勢を正していた。

「冗談だよ、中尉。そう固まるな」

隣でびっくりしていた霞の頭を撫でながら、オレは苦笑して見せた。

「貴様達もそんな所に突っ立ってないで、こっちにこないか？」

「ほう、幼女に飽きたら美人どころに囲まれるおつもりで？」

さっきのオレの態度が冗談だと分かるや否や、再びからかう様な仕草を見せる宗像中尉。

この人も中々自重しねーな。

「白銀少佐に敬礼！！」

「ああ、そういうのはいい。副司令直属なら分かるだろ？」

号令を掛けた伊隅大尉にそう言うと、彼女は苦笑いでそれに従ってくれた。

各々オレと宏輝の周りに腰掛け、朝食を始める。

「でも少佐と社ちゃんって仲がいいですね」

最初に口を開いたのは藤堂沙希少尉だった。

合成鯨の竜田揚げをぐまぐましながらそんな事を言ってくる。

「ああ、“昔から”の顔馴染みでな。妹みたいなものさ」

「なるほど…少佐は幼女趣味なのですね。」

どうしてそういう結論になっちゃうのか。宗像中尉に視線を送ると、何食わぬ顔で鯖味噌を食べていた。隣にいた風間少尉が「もう、美冴さんったら……」と呆れ顔。他の面子はくすくすと笑顔だ。

「霞は可愛いがそういう対象じゃないぞ」

「——むしろ狙いは訓練生だしな」

復活して第一声がソレか……

誤解を招くような発言は勘弁して欲しい。

「宏輝、お前後で覚えてるよ」

「独り身の前で見せ付けるお前が悪い」

そんなつもりは微塵も無いんだが。

「あら？伍江大尉にはいい人はいらっしやらないんですか？」

意外そうに声を上げたのは森崎奈央少尉。

まあ宏輝は、男のオレから見てもカッコイイ部類に入ると思う。その上、大尉っていう階級持ちなら、彼女の一人や二人はいてもおかしくはないよな。

当の本人は笑顔を浮かべて一言。

「いたけどな。皆死んだよ」

感傷も無く、気負いも無く、後悔も無く、事実だけを簡単に告げる。このご時世、恋人と死に別れた。なんて話は別に珍しい話じゃない。自分だけが特別不幸だなんて思っちゃいない。事実を事実として受け止めるだけ、か。

「すみません、伍江大尉……」

「んー？気にする事はねえよ」

いつの間にか煙草を銜ながら、ぱたぱたと手を振ってみせた。少し落ち込んだ空気に、宏輝は笑顔のまま言葉を続ける。

「コレだけ美人に囲まれてりゃ俺の心も癒えるさ」

「……………よく言う。」

素面でんな事言えるなんて、感心を通り越して呆れちまう。伊隅大尉なんて溜息付いてるし。

「では、伍江大尉は我々の中で食指が動いた者がいると?」

興味深そうに宗像中尉が尋ねている。聞かない方がいいと思うんだけどなあ、特に貴女は……

「ああ。伊隅と宗像はドストライクだな。速瀬と涼宮も捨てがたい」

「……!!??」「」「」

おお、一瞬で4人の顔がが赤くなった。割と真面目な表情で宏輝が宣言したあたり、信憑性は高いと思われる。で、呼ばれなかった3人は少しだけ残念そうだ。

だが残念だったな宏輝。そのメンバーには大きな落とし穴があるんだぜ。

「想い人がいる女性に横恋慕はみつともないぞ」

「……!!??」「」「」

しまった、好きな人の話って内緒の人もいるのに、思わず口にしまった。「何で知ってる」って追求されたら『夕呼先生』の名前を出して逃げよう。

現に驚いた表情で4人がオレを見てるし、残りの3人も不思議そうに見てる。

宏輝は苦虫を噛み潰した表情で、オレを見ていた。

いや……悪いのはオレじゃないだろ？

因みにさっきから黙ったままの霞は、一人黙々と鯖味噌定食を食べている。

「くっ…まあ少し考えれば、コレだけイイ女が揃ってるんだから…

…男の1人や2人、居てもおかしくはねえか」

流石に2人居たらおかしいと思うけど、空気読んで声には出さない。あと、本気で悔しそうに言うのはヤメロ。なんか哀れすぎて声が掛け辛えよ！！

しかも今思い出したけど、速瀬中尉と涼宮中尉の想い人って戦死してたんだっけ……

くそっ。自分の考えの足りなさが嫌になるぜ。

「そっですよ、伍江大尉。涼宮中尉には彼氏さんがいらっしやるん

ですから、口説くのはダメですよ」

自己嫌悪しているオレを余所に、藤堂少尉が意味深な事を口走った。

（涼宮中尉には彼氏がいる？ 確か明星作戦で想い人は亡くなったはずだろ…… とういうことだ……）

おかしい事だらけの“今回のループ”、また変化が一つ、か。

でも生きているなら、何でA-01に居ないんだろうか？ 他の部隊に配属って訳でも無さそうだし。

「はやく退院してこられるといいですね」

「う、うん。 えへへ……」

「あの馬鹿が帰ってきたら、また遥から惚気を聞かされるのか」。

「そんなことしないよ、水月ったら」

「平井さんも思い出してあげようよ……」

森崎少尉・涼宮中尉・速瀬中尉・神楽少尉が楽しそうに談笑している。 いつの間にか、宏輝は藤堂少尉と好きな食べ物の話で盛り上がっていた。 宗像中尉と伊隅大尉は、さっきのオレの発言に対して文句を言いたそうだったけど、風間少尉に宥められていた。 霞はようやく食事が終わったのか、お茶を飲んで一息。

この時間が長く続けばいいと思う。

こんな何気ない時間こそが、何よりも大事なんだ。

ソレを取り戻すためにも、やらなきゃならない事は多いよな。

“今回の件”に関しても、もう一度夕呼先生と話し合う必要もありそうだな。

オレ達は、もうこれ以上の失敗をするつもりは——無い。

——捻じ曲げられた『因果』の集う世界。

——ソレは僅かではあるが異変を齎す。

——だが、気付く者は皆無。

——故に、戦士たちよ。

——その道を違える事なきように……

寄り道くそれはある朝の喧騒く（後書き）

次回『―死人―』

何故、此处に居る？

— 死人 — (前書き)

投稿が大分遅くなってしまいました……指がなかなか動かないなあ……
今回は普通の前書きでお送りします。

—死人—

< 伍江 宏輝 >

「くうー、終わったー!!」

「……身体が鈍ってるなあ」

身体をゴキゴキと伸ばしながら、俺と武はシミュレーターデッキから出て行く。

朝食が終わって直に、X M 3 のバグ取りを始めて早 10 時間。ほぼ休憩なしで、ありとあらゆる戦況下での動きのデータを蓄積させて、社・ピアティフ中尉・副司令の三人で処理処理処理の繰り返し。

これでβ版は完成ということらしい。

後は細かい修正点を入れつつ、シミュレーター全機に換装。207

訓練分隊（まあ彼女達は総戦技演習に受かってからという事になるが）やA-01の連中が各々更に色付けをして、完成品のお披露目という流れだ。

「先生、霞、中尉。お疲れ様でした」

多少気だるい俺達と違って、事務方三人はすこぶる消耗していた。まあ、神経使う作業を、分担とは言え10時間もぶっ通しだからな。流石にヘタって当然だ。

「本来なら文句の一つも言ってやりたいところだけど――」

疲労の影は隠せないけど、副司令はモニターに移るデータを見て、ニヤリ。と笑い。

「――面白いものも出来たし。ま、いいとしましょう」

二人で揃って深々と三人に頭を下げる。

さて、教導に関してはこれからが本番。伊隅達や神宮寺軍曹に二次元機動を叩き込まなきゃならない。

ソレが終わればX-M3は全世界に普及して、衛士の戦死率をぐっと下げてくれるだろう。そうしてやっと人類は反撃できるわけだ。いいねえ、なんか勝利フラグ立ってきたよ。

「さーて、お仕事も終わったし。俺は一服して来ようかな……武、お前は？」

「朝に話したろーが。少し話したい奴がいるんだよ」

……言つてたな、そういえば。
まだ消灯時間じゃないとは言え、夜遅くに女の子の部屋訪ねるなんて……どうかと思うな。うん。

「屋上行くのか？」

今度は武が俺に聞いてくる。

屋上はココでのお気に入りスポットの一つだ、風を感じられるのはいいぜ。

まあ、やる事なんて煙草吸う位しかないんだけどね。

「おう。で、武よ……消灯時間も近いし、行くなら早いほうがいいぞ。こつちの後処理は俺がやつとくわ」

肩をぐるぐる回しながら、俺は副司令達の所に歩き出す。
とりあえず茶でも入れるか。

「悪い、宏輝……」

えらく神妙にそんな事を呟いて、武は飛び出した。

と、思っただらすごいスピードで戻ってきた。

「先生、お疲れ様でした。先生ばかり負担をかけますけど、XM
3……よろしくお願いします」

「霞、今日もお疲れ様。ゆっくり休んでくれよ。明日もご飯食べような」

「ピアティフ中尉、ご苦労様でした。中尉もしっかり休んでくださいな」

またね。と最後に付け加えて、再び飛び出す武。
凄いな、速さは十分足りてるようだ。

で、視線を三人にやると……

副司令、ちよとにやにや。

霞、頬が赤い。

中尉、嬉しそう。

うわあああああああああああああ！！持ってたあああ

あああああああああああ！！

何を、とは言わない。人類に希望を持たせた英雄は、俺に希望を持つことはさせてくれなかったようだ。

恐るべし、白銀武。あれで結構紳士だから性質が悪い。いずれ紳士という名の変態にジョブチェンジさせてやるぞ。

「で、伍江。アンタは何してるの？」

崩れ落ちて咽び泣く俺を、冷たい眼で見ながら口を開く副司令。

この対応の差、泣けてくるっ！！

この後、お茶入れたり細かい作業を手伝いながら、俺は株を上げるのに必死だった。

さて、お茶も振舞い終わり、後片付けの手伝いも済ませてしまつて俺は一人、屋上に出ていた。

ここで風を感じながら煙草をすうのが好きなんだよなー。これで星空も見えれば完璧なんだが、あいにくと今日は雲が多くて期待は出来そうに無かつた。

「ふはー……」

フェンスに身体を預け、空を見上げて煙を吐き出す。

この二日間でX M 3の雛形は完成した。副司令達には感謝してもしきれない。

何時B E T Aの糞野郎が攻めて来るかは分からない。なるべく急いでヴァルキリーズと神宮寺軍曹の教導も終わらせたいところだ。

後は……まあ、武が懸念してる訓練兵達なんだが……

「A分隊はともかく、Bはどうなんかねえ……」

何度か彼女達の訓練に顔を出したけど、訓練兵とは思えぬ技量の高さにはびっくりした。特にB分隊の連中は個人技ならば並の正規兵

よりは上なんじゃないか？と、思わせるほどだ。

逆にA分隊は平均的に技量が高く、チームワークも加わって、中々穴の無い部隊に仕上がっていた。個人訓練ではBの連中が圧倒する事が多かったけど、チーム組んでの模擬戦闘では、Aに歯が立っていないかった。

技量的に問題は無いんだ。しかし、B分隊のチームワークの悪さは今から衛士になろうって人間には致命的だろう。

あいつ等は仲間を信用しちやいない。それ以前に、隣にいる仲間を仲間だと思っているかどうかも疑わしい。

ありやダメだ。あんなんじゃ仲間を殺しちまう。背中を預けられない仲間がいるってのは、戦場じゃ敵より怖い存在だ。

武は彼女達の生い立ちが関係してると言っていたが……

「総戦技演習、あの感じじゃ無理っばいな」

シミュレーター室を出る前に、副司令が言っていた。

—— 10日後にバカンスに出かける。

つまりはそういうことなのだろう。このご時世にバカンス、なんて言えばだいたい察しはつく。

衛士への第一歩。戦術機の訓練課程に進むための最初の試練。

これを取り越えなければ、衛士なんて夢のまた夢。技術的には問題なからうが、チームワークがバラバラじゃ乗り切るのは難しいだろう。

将来有望な衛士候補なんだから、しっかり頑張っ欲しいモンだ。

吸い終わった煙草を靴で揉み消し、ポケットに入れておいた茶封筒を取り出す。

副司令に頼んでおいた“この世界”での俺の経歴が入っている。渡されたときに意味ありげな顔で笑ってたけど、なんとなく予想は付いてる。と言うか、間違いないんだろうなあ……

取り出した書類を見て、俺は盛大に溜息を吐いた。

バストアップの写真は間違いなく俺のモノ。ただし、来ている服は国連軍の物でも帝國軍の物でもなく――

「斯衛軍」

何だろう、気分は外れくじを引いた感じた。気を取り直して、二本目の煙草に火を付け、書類にざっと目を通す。

伍江宏輝、帝國訓練校を上位の成績で卒業。戦術機の訓練課程でも非凡な才能を発揮させ、特に射撃の技術に秀でていた。

BETAの日本進攻の際、防衛戦に参加。所属の部隊が二度壊滅するも本人は無事帰還。最後まで戦い抜いた功績と戦術機の操縦技術を買われて、斯衛軍に入隊する。

愛国心と忠誠心の高さから斯衛軍での評価は高かった……か。

なんかここらへん俺とは違って優秀だったんだねえ。愛国心に忠誠心か、今の俺からじゃ考えられんわ。

で、明星作戦でG弾に巻き込まれ死亡つと。
へー、親父とお袋も斯衛軍だったのか。俺がガキの頃に死んでるのは変わってないみたいだな。

家族構成には変わりが無く、親父とお袋の名前も一緒だった。違うものと言え、俺の出来のよさだけか。

「こりや帝都には近寄らないほうがイイかね」

猛烈に嫌な予感がするのだ。なんか絶対面倒な事に巻き込まれそうな予感が。

「なんかどつと疲れた……戻って寝るか」

書類をポケットに押し込み、煙草を捨てようとした瞬間、屋上のドアから人影が現れた。

おいおい、完璧に気配消してんじゃねーよ。視認するまで気が付かなかったぞ。

暗殺者とかだったらお帰り願いたいんだがねえ。

「……伍江宏輝」

名前を呼ばれた。凜とした女の声。

夜の闇に慣れた目を凝らせば、その姿が見えた。

淡い緑の長い髪に、気の強そうな瞳。抜き身の刀のような張り詰めた雰囲気を持つ女性。

紅い斯衛の服……って斯衛だと！！??

「俺に何か用か？」

平静を装ってはいるけど、内心では軽くパニックになっている。
いや、いずれは接触図ってきたりするんだろうなーってのは思ってたけどさ、幾らなんでも早くねえか？

こういうイベントはゆっくり頼む。遅めで頼む！！スロウリイでインだつて！！

「……………死人が何故此処にいる？」

実に単刀直入に彼女はそう言い放ってきた。

流石の副司令も城内省のデータベース改竄までは手が回らなかったか。以前に武と『そう言う会話』はしていたけど、上手く誤魔化せつてなあ。

「死人に見えるか？俺が。足はちゃんと生えてるぞ？」

「なるほど、確かにそうだな。ならば質問を変えよう」

口元にぞつとするほどの冷笑を浮かべ、彼女の眼光が俺を射抜く。

「宏輝に成り済まして何をするつもりだ、貴様！！」

成り済ます。確かに間違いじゃないかもな。“この世界”の伍江宏輝はいない。もう死んだ。その場所に俺がいる。

死んだから、俺がこうして此処にいる。知っていた人間から見れば、俺は成り済ましてるように見えるわけだ。

という事は、彼女は“この世界”の知り合いだったわけか？何か最近似たような紅いを見た気がするんだけど……

「アンタ、俺の事知っているのか？」

「……？」

「えっと、実は二年前からの記憶が無くてな。香月夕呼副司令に拾われてお世話になってるんだが……」

「ほう。よく出来た嘘だな」

「あれ、嘘決定ですか？」

実際嘘なんだが、もう少し悩むそぶりとかあってもいいんじゃないかと思う。

キツイ視線は変わらず、彼女は俺を観察していた。

「今一度問うぞ、伍江宏輝……」

隠そうともしない殺気に、冷や汗が出る。

ここで戦い合うなんて事にはならないだろうが、どうにも冗談で切り抜けられる状況じゃ無さそうだ。

流石に俺にだってそこら辺の分別は付く。

「死人である宏輝に成り済まし、冥夜様に近づいた目的は何だっ！
！」

冥夜様？……ああ御剣訓練兵の事か。確か將軍閣下の妹なんだよな、彼女は。

実際に何か企みがあつて彼女に近づいてるのは武であつて、俺はそのお手伝いをしているに過ぎない。

言って信じるかなあ……優秀な衛士を育てるため、彼女たち207分隊を死なせないため……聞き分け悪そうな女だし。

「俺は上官の命令に従って行動してるモンでねえ、詳しく知りたいんなら白銀武少佐か香月夕呼副司令に聞くのがイインじゃないかと」

「何処までも誤魔化すつもりか？」

「いやいや、俺が知ってる事なんて最終目的が“人類の勝利”ってやつだけだから。そこにいたる過程とか、どんな人材が欲しくてそのために何をするとかはまったく」

うーん、何を言っても信用しないぞ、って顔してるなあ。機密事項なんざ無ければ喋っても良いんだろが、流石に軍人としてやってきて多少の分別は付いた。ヘタな事喋って殺されるとかもう嫌だ。俺——伍江宏輝が死んでいない。という事も納得して貰わなければ困る。とは言え知り合い（多分）を騙すつてのが上手くいくかどうか……俺じゃなくて副司令あたりに「実は記憶喪失になってるんです」とでも説明してもらえれば分かってもらえるんじゃないだろうか。いやいや、何か逆効果な気もしないでもない。ただ単に胡散臭さが増すつてのも勘弁してもらいたいわ。

「あのさ、紅い人」

「——っ!!」

スゲー睨まりました。

だってなあ、自己紹介とかしてもらって無いしね。名前も階級も分から……あ、階級章発見。

「すまん、中尉。名前聞いてもいいか？」

腰に差した刀に手をやって、紅い中尉はプルプルと震えていた。

屋上は少し風が出てきたから寒いだろう、俺の上着を貸してもいいのだが、彼女素直に受けとる

「ソレを……貴様が聞くと云う事は、やはり偽者か……」

俯いた顔、震えた声、なんか地雷踏んだ俺。

よくよく考えりゃ、さっき自分の中でこの女は“この世界の伍江宏輝”の知り合い。と結論付けてた癖に、名前を聞くとは何たる失態。これじゃ自分で偽者です。と吹いてるようなもんだぞ。

記憶喪失説はさっき一蹴されちゃったし、絶対絶命なんじゃなかるーか。

「ふつーはさ、警告からじゃないのか？」

威嚇用じゃなくて、実戦用の殺気か。俺の言葉に答えもせず彼女が少しだけ動く。

身体を半身に。何というか……実に斬る気満々である。こうなってしまうてはもうやるしかないだろう。半殺しで止めてくれれば儲けものだ。

俺がな……

覚悟は決まった。

先手必勝！―と、飛び掛ろうとして――

「伍江さん……ダメ……です」

「二人とも、止めろ」

聞こえてきたロリコンとウサギっ娘の声。

取りあえずは助かったようだ。目の前の赤い中尉も殺気を収めてしまっている。

さてさて、武も来てくれた事だし、これで多少は説得がしやすくなったかね。

こちらに歩み寄る二人を見ながら、俺は安堵の溜息を吐いたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777q/>

マブラヴオルタネイティヴ オリジナルループ

2011年4月20日23時49分発行